慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	三田学会雑誌総目録 自昭和六年第二十五巻第一号 至昭和三十二年第五十巻第十二号
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1957
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.50, No.10/11 (1957. 11) ,p.1- 46
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	第五十巻記念論文集
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19571101-0229

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田学会雑誌総目録

自昭和六年　第二五巻　第一号
至昭和卅二年　第五〇巻　第一二号

慶應義塾経済学会

目次

凡例
A 経済理論・経済学史・社会思想……一
経済理論 一〇一―二四八……一
経済学史 三〇一―四五三……五
社会思想 五〇一―五五三……一二
B 統計学・計量経済学・人口論……一四
統計学 一〇一―一〇七……一四
計量経済学 二〇一―二三一……一四
人口論 三〇一―三一五……一五
C 経済史……一五
総論 一〇一―一〇六……一五
日本 二〇一―三一三……一六
外国 四〇一―四七二……二〇
D 経済地理……二三
経済地理 一〇一―一二〇……二三
E 世界経済（貿易・海外事情を含む）……二三
世界経済 一〇一―一七二……二三
F 産業部門……二六
農林・水産・鉱業 一〇一―一三五……二六
工業 二〇一―二二〇……二七
商業・交通 三〇一―三三四……二八
G 経営・会計……二九
経営・会計 一〇一―一五五……二九
H 財政・金融・保険……三一
財政 一〇一―一四八……三一
金融 二〇一―二四七……三三
保険 三〇一―三〇五……三四
I 労働・社会問題……三四
労働・社会問題 一〇一―一九一……三四
J 社会学……三八
社会学 一〇一―一五六……三八
K その他……四〇
その他 一〇一―一一九……四〇
人名別索引……四一

凡例

この総目録は三田学会雑誌第二五巻第一号より第五〇巻第一二号までに掲載された論説および資料（ただし書評をのぞく）の部門別ならびに人名別総目録である。

部門別総目録は部門別目次所掲のごとく、AよりKまでにわかち、必要に応じさらにこれを細分した。部門内の論説および資料の排列は掲載の年代順により、それぞれに部門内番号を付した。

人名別総目録は、執筆者名のローマ字（ヘボン式）書きABC順に排列した。たとえば「F二二〇」はF産業部門 二二〇「化繊産業に於ける中小機業の分析――その発展に於ける問題性について」を意味する。

各巻の発行年度は下記の通りである。

昭和六年 第二五巻 第一号―第一二号
昭和七年 第二六巻 第一号―第一二号（第一〇号は慶應義塾創立七五年記念論文集）
昭和八年 第二七巻 第一号―第一二号
昭和九年 第二八巻 第一号―第一二号
昭和一〇年 第二九巻 第一号―第一二号
昭和一一年 第三〇巻 第一号―第一二号
昭和一二年 第三一巻 第一号―第一二号
昭和一三年 第三二巻 第一号―第一二号
昭和一四年 第三三巻 第一号―第一二号
昭和一五年 第三四巻 第一号―第一二号（第一〇号は皇紀二六〇〇年、慶應義塾大学部設立五十年記念論文集）
昭和一六年 第三五巻 第一号―第一二号
昭和一七年 第三六巻 第一号―第一二号
昭和一八年 第三七巻 第一号―第一二号
昭和一九年（八月まで） 第三八巻 第一号―第八号（三・四号及び五・六号は合併号）
昭和一九年九月―昭和二一年六月 休刊
昭和二一年（七月より） 第三九巻 第一号―第六号（但し第一号を七月に発行）
昭和二二年 第四〇巻 第一号―第一二号（第七・八・九号は合併号、慶應義塾創立九十年記念号第一輯。第一〇・一一・一二号は合併号、慶應義塾創立九十年記念号第二輯）

昭和二三年　第四一巻　第一号―第一二号（第一・二号は合併号。第一〇号は価値論特輯。第一一・一二号は合併号）
昭和二四年（六月まで）　第四二巻　第一号―第六号（第五・六号は合併号）
昭和二四年七月―昭和二五年六月　休刊
昭和二五年（七月より）　第四三巻　第一号―第六号（但し第一号を七月に発行）
昭和二六年　第四四巻　第一号―第一二号（第二号は特集号・関東農村の史的研究〔第一集〕。第三・四号は経営経済学特集合併号。第八・九号は合併号）
昭和二七年　第四五巻　第一号―第一二号
昭和二八年　第四六巻　第一号―第一二号（第二号は特集号・関東農村の史的研究〔第二集〕。第八・九号は特集合併号・S県S郡K町漁業実態調査報告）
昭和二九年　第四七巻　第一号―第一二号（第三号は特集号・関東農村の史的研究〔第三集〕。第九・一〇号は合併号）
昭和三〇年　第四八巻　第一号―第一二号（第二号は特集号・関東農村の史的研究〔第四集〕）
昭和三一年　第四九巻　第一号―第一二号（第二号は特集号・関東農村の史的研究〔第五集〕。第五号は計量経済学特集。他に一二月に「日吉特別号」を発行）
昭和三二年　第五〇巻　第一号―第一二号（第三号は経済史特集号。第一〇・一一号は五〇巻記念特集合併号。他に一二月に「日吉特別号」を発行）

部門別目録

A　経済理論・経済学史・社会思想

経済理論　A一〇一―二四八

〔番号〕	〔論題〕	〔執筆者〕	〔巻〕	〔号〕
一〇一	理論経済学の対象	奥田忠雄	二五	三
一〇二	カッセルの価格論と自由競争論	気賀健三	二五	四
一〇三	ピグウ教授の産業変動論に就て	小高泰雄	二五	五
一〇四	理論経済学方法論叙説	奥田忠雄	二五	八
一〇五	価値学説無用論と限界効用理論	気賀健三	二五	九
一〇六	弁証法研究に関する若干の文献	奥田忠雄	二五	一一
一〇七	余剰価値と利潤	小泉信三	二五	一二
一〇八	観念論に於ける現実性認識への端緒――理論経済学方法論叙説――	奥田忠雄	二六	二
一〇九	労働価値説の基本的考察	伊東岱吉	二六	三
一一〇	現実性認識への道――理論経済学方法論叙説――	奥田忠雄	二六	三
一一一	経済的原則の意義	気賀健三	二六	四
一一二	"A Treatise on Money"に現はれたるケーンズの金融理論に就いて	吉田寛	二六	四
一一三	帰算理論と分配論――墺太利学派の分配論に就いての一考察――	小池基之	二六	六
一一四	弁証法の基本的諸特徴と体系とに就いて――理論経済学方法論叙説――	奥田忠雄	二六	六
一一五	労働価値説の諸問題	伊東岱吉	二六	八
一一六	経済学の「社会的法的」基礎	気賀健三	二六	九
一一七	経済学の心理的、個人主義的基礎――リーフマンの経済学方法論――	気賀健三	二六	一〇
一一八	統制経済と計画経済	向井鹿松	二六	一〇
一一九	景気観測の基礎問題――経済的発展の基本的傾向の叙説――	小高泰雄	二六	一〇
一二〇	現象形態論――（理論経済学方法論叙説）――	奥田忠雄	二六	一〇
一二一	量の範疇に就いて――機械論並に数理経済学方法論の批判――	奥田忠雄	二六	一一
一二二	物価論上に於ける一論争	小高泰雄	二七	一
一二三	貨幣に対する社会的信認	萩原吉太郎	二七	四
一二四	価値と経済的ディメンジオン――ゴットルの価値論――	気賀健三	二七	五

一三五 最近景気観測に現はれたる理論と統計の折衷的傾向に就て　小高泰雄　二七六
一三六 客観的価値論批判——特にオッペンハイマーの価値論——　気賀健三　二八一
一三七 批判的景気観測に就ての若干の考察　小高泰雄　二八五
一三八 限界効用理論の擁護　気賀健三　二八七
一三九 経済政策学の可能性　気賀健三　二九四
一三〇 転換期に立つ理論経済学　武村忠雄　二九七
一三一 戦争経済学の文献に就いて　武村忠雄　二九一
一三二 経済政策の目的論的観察　気賀健三　二九三
一三三 独占段階に於ける動態理論——独占と景気変動——　武村忠雄　二九一
一三四 ヘンリー・ムーアの具体的動的均衡の理論体系に就て　寺尾琢磨　三〇七
一三五 価値論と計画経済　気賀健三　三〇九
一三六 カルテル諸形態の質的高度化過程——独占結成の動態学の一節——　武村忠雄　三〇九
一三七 経済政策の目的　気賀健三　三一一
一三八 景気の独占結成に及ぼす作用——独占結成の質量変化の交代過程——　武村忠雄　三一二
一三九 景気循環と商品貯蔵量の関係　山本登　三二二
一四〇 天体的景気理論の二つの基型　寺尾琢磨　三二六
一四一 自由主義の経済政策　気賀健三　三二七
一四二 統制経済と景気変動　武村忠雄　三三七
一四三 社会主義経済と経済的福祉　気賀健三　三三一
一四四 統制経済と再生産過程——『統制経済と景気変動』研究の一節——　武村忠雄　三三一
一四五 カッセル価値学説無用論概説　千種義人　三三四
一四六 インフレーション対策——統制経済段階に於ける再生産過程の内的矛盾とその止揚——　武村忠雄　三三六
一四七 カッセル貨幣価値決定論に関する若干の考察　千種義人　三三七
一四八 景気変動論の端初的形態　武村忠雄　三三四
一四九 人口理論と理想社会　小林宗三郎　三三五
一五〇 カッセルによる価格の意義とその決定原理　千種義人　三三五
一五一 カッセルの価格構成機構論　千種義人　三三六
一五二 純粋景気理論の方法論的構造　武村忠雄　三三七
一五三 理論と実践——最近イギリスにおける経済学方法論論争——　野村兼太郎　三三八
一五四 ケインズの「一般雇傭理論」　千種義人　三三一
一五五 転換期経済学の国防経済学的性格　武村忠雄　三四二
一五六 貯蓄投資の均等説について——ケインズ「一般理論」を中心として——　千種義人　三四三
一五七 再生産理論の構造変化——国防経済学研究の一節——　武村忠雄　三四六
一五八 貯蓄投資の均等説をめぐる論争　千種義人　三四七

一五九 技術の概念——テヒノロギイへの一試論（上）——　豊田四郎　三四七
一六〇 新体制と統制経済　加田哲二　三四一〇
一六一 国防経済欲求　武村忠雄　三四一〇
一六二 消費性向と乗数理論　千種義人　三四一〇
一六三 『テヒノロギイ』の系譜　豊田四郎　三四一〇
一六四 国防経済欲求の調達——国防経済の再生産過程——　武村忠雄　三四一一
一六五 ケインズの長期予想理論——資本の限界効率理論を中心として——　千種義人　三四一三
一六六 経済の政治化——全体主義経済政策の根本問題——　気賀健三　三四一三
一六七 国防経済欲求と調達の持続的調和　武村忠雄　三五四
一六八 強制貯蓄の必要とその方法——ケインズの強制貯蓄案——　千種義人　三五五
一六九 政治経済学の意味　気賀健三　三五六
一七〇 戦争本質論の一研究——クラウゼヴィッツの戦争論を中心として——　加田哲二　三五一〇
一七一 広域経済の動態学　武村忠雄　三五一一
一七二 経済理論と統制経済　気賀健三　三五一三
一七三 ケインズ利子論概説　千種義人　三六三
一七四 現代の統制経済の性格と問題　気賀健三　三六七
一七五 現代統制経済政策の理論的分析　気賀健三　三六一三
一七六 経済学名著解題　一千八百四十八年版ブルノー・ヒルデブラント著『現在及び将来の国民経済学』第一巻　高橋誠一郎　三七三
一七七 貨幣理論と経済理論の結合——ミュルダール「貨幣的均衡」を中心として——　千種義人　三七三
一七八 生産経済思想史概観　高橋誠一郎　三七四
一七九 統制経済における計画　気賀健三　三七五
一八〇 流動性選択説と信用需要供給説　千種義人　三七一〇
一八一 公定価格と統制的均衡　気賀健三　三七一一
一八二 貨幣的均衡理論の再検討　鈴木諒一　三七一二
一八三 統制経済における価格政策の課題　気賀健三　三八（三四）
一八四 貨幣的均衡と生産計画　鈴木諒一　三八（八）
一八五 統制経済における資本の本質　千種義人　三八八
一八六 利子動態説への回顧　気賀健三　三九一
一八七 資本主義経済か社会主義経済か　千種義人　三九一
一八八 計画経済への道　気賀健三　三九三
一八九 機械疲労度の経済的意味　鈴木諒一　四〇一
一九〇 貨幣経済に於ける均衡の性質　鈴木諒一　四〇三
一九一 計画経済の一極限　千種義人　四〇三
一九二 累積過程の変則——ハイエク「利潤、利子及び投資」の吟味の一——　千種義人　四〇（一〇）（一一）
一九三 労働の二重性とその展開　遊部久蔵　四一（一一）
一九四 『価値法則と社会主義社会』の問題に寄せて　中山三郎　四一（一二）

一九五　価値表現の両極について　遊部久蔵　四一
一九六　近代価値理論の展望　福岡正夫　四一
一九七　再び『価値法則と社会主義社会の問題』によせて　中山三郎　四一
一九八　経済価値の概念——価値論序説——　千種義人　四一
一九九　貨幣利子率と資本の限界効率　千種義人　四一
二〇〇　価格体系の変化の法則に関する覚書　福岡正夫　四一
二〇一　商品の二要因の対立について——反省規定の論理学——　遊部久蔵　四二
二〇二　比較静学・極値条件と安定条件——理論経済学の若干の基礎——　福岡正夫　四三
二〇三　ケインズ経済学の発達　鈴木諒一　四三
二〇四　ジョーン・M・ケインズ——予言者ケインズの未来像——　千種義人　四三
二〇五　カール・マルクス——人間の自己疎外と商品の物神性——　遊部久蔵　四三
二〇六　ヨーゼフ・A・シュンペーター——革新の経済学——　福岡正夫　四三
二〇七　『物質主義的定義』と『稀少性定義』の思考様式における差異　富田重夫　四三
二〇八　外資導入と国民所得の構造　鈴木諒一　四三
二〇九　ピグウ教授の国民所得評価論　福岡正夫　四四
二一〇　稀少性原理と先験主義　富田重夫　四四
二一一　価格と企業行為——主として売手が少数である市場について——　山部徳雄　四四
二一二　流動均衡と期間分析法　鈴木諒一　四五
二一三　「生産的労働」について　遊部久蔵　四五
二一四　経済分析と経済予測の方法論　武村忠雄　四五
二一五　独占と競争——シュムペーターについて——　山部徳雄　四六
二一六　限界生産力説における若干の問題点　鈴木諒一　四六
二一七　経済法則の論理的性格及びその妥当性に関する若干の考察　富田重夫　四六
二一八　厚生経済学の基礎についての若干の吟味　千種義人　四六
二一九　巨視的動学理論における成長率の問題　鈴木諒一　四六
二二〇　スターリン論文における経済法則論　気賀健三　四七
二二一　恐慌の資本制的性格といわゆる„Der Letzte Grund“について——「過少消費説」克服のために——　常盤政治　四七
二二二　実践的価値判断の論理的基礎——M・ウェーバーの没価値性理論を中心として——　富田重夫　四七
二二三　投入—産出模型について　千種義人・大熊一郎　四七
二二四　投入産出分析(一)——基礎理論——　福岡正夫　四八
二二五　投入産出分析(二)——逐次解法その他　福岡正夫　四八
二二六　投入産出分析(三)——動学的レオンティ

イェフ体系——　福岡正夫　四八
二二七　理論経済学の性格と日本経済　鈴木諒一　四八
二二八　厚生経済学と倫理的価値判断　富田重夫　四八
二二九　線形計画論・Simplex Method　福岡正夫　四八
二三〇　Japanese Economic Thought.—A Foreigner's Eye View. Bronfenbrenner M.　四九
二三一　線形計画論・双対性定理　福岡正夫　四九
二三二　経済計画と価値法則の利用　加藤寛　四九
二三三　デュウゼンベリの投資理論　大熊一郎　四九
二三四　価値論からみたケインズ『一般理論』　遊部久蔵　四九
二三五　遊戯問題の若干の特殊な解法について　福岡正夫　四九
二三六　産業連関表と社会勘定　大熊一郎　四九
二三七　アグレゲーションと分布の問題　鈴木諒一　四九
二三八　線形計画論・遊戯論との関係　福岡正夫　四九
二三九　経済理論の歴史性——M・ウェーバーの理念型理論を中心として——　富田重夫　四九
二四〇　競争と計画　気賀健三　四九
二四一　経済政策の目的と価値判断　加藤寛　五〇
二四二　均衡点の存在定理——最近の理論経済学界の一動向——　福岡正夫　五〇
二四三　経済学における精密法則の論理的妥当性と現実適用可能性　富田重夫　五〇
二四四　資本の集積・集中と分裂・分散——部門別目録　北原勇　五〇
二四五　中小工業論序説——独占の功罪　千種義人　五〇
二四六　社会主義的再生産と価値法則　加藤寛　五〇
二四七　社会主義と生産手段の公有論　気賀健三　五〇
二四八　生産的労働とサーヴィス　遊部久蔵　五〇

経済学史 A三〇一—四五三

三〇一　近世初期の失業対策と就業権論　高橋誠一郎　二五一
三〇二　ジェイ・エス・ミルの経済学方法論　浜田恒一　二五二
三〇三　山鹿素行の経済学説　野村兼太郎　二五四
三〇四　ジョン・ベラーズ研究　高橋誠一郎　二五五
三〇五　セイの消費論　増井幸雄　二五六
三〇六　正徳享保時代の社会経済論概説　野村兼太郎　二五九
三〇七　ジョン・エリオット・ケアンズの経済学方法論　浜田恒一　二五九
三〇八　マーカンチリズム時代の人口学説　高橋誠一郎　二五九
三〇九　恐慌論上に於けるシスモンディとフォン・キルシュマン　小高泰雄　二二一
三一〇　フリイドリッヒ・フォン・ウィーザアの帰算理論　小池徳太郎　二二三
三一一　マーカンチリズム時代の主権及び財産理論　高橋誠一郎　二六一
三一二　太宰春台の経済論　野村兼太郎　二六二
三一三　英国歴史学派に於ける方法論の発達　浜田恒一　二六五

三二四　セイの私的及公的消費論　増井幸雄　二六六
三二五　ボアギュルベールの「富の本質論」——フイジオクラアト学説の出所再吟味——　下田博　二六七
三二六　荻生徂徠の経済論　野村兼太郎　二六八
三二七　カアル・メンガアと価値心理学　小池基之　二六一〇
三二八　ジ・ベ・セイの交換論　増井幸雄　二六一〇
三二九　徳川時代に於ける商業論の変遷　野村兼太郎　二六一〇
三三〇　賃銀学説史上の収益説　高橋誠一郎　二六一〇
三三一　英国自由主義の終焉　浜田恒一　二六一二
三三二　恐慌論と修正主義　町田義一郎　二六一三
三三三　梅園、万里及び福沢先生の経済論　高橋誠一郎　二七一
三三四　通貨論を中心として再び福沢先生の経済論を観る　高橋誠一郎　二七二
三三五　フイジオクラアト以前の重農思想　下田博　二七四
三三六　新マルサス運動の先駆者フランシス・プレースと其の時代　寺尾琢磨　二七四
三三七　アダム・スミス蔵書目録新版　小泉信三　二七五
三三八　新井白石の経済論　野村兼太郎　二七八
三三九　ペリクレス時代以後に於ける希臘の社会不安　高橋誠一郎　二七一〇
三三〇　貝原益軒の社会経済思想　野村兼太郎　二八六
三三一　アリストテレースの生涯と其の政治理論　高橋誠一郎　二八九
三三二　トーマス・ペイン論（その生涯並びに政治思想）　浜田恒一　二八一〇
三三三　カール・ムースのカルテルと景気運動との関係に就いての研究　小高泰雄　二八一二
三三四　明治時代における経済的国民主義の成立　加田哲二　二八一三
三三五　マルサス人口論及び経済学説関係文献　加田哲二　二九一
三三六　トーマス・ロバート・マルサスと彼れの所謂「経済学上の新学派」　高橋誠一郎　二九一
三三七　古版経済書解題　サー・トーマス・コールペッパア著一千六百四十一年版『高利排斥論』　高橋誠一郎　二九三
三三八　古版経済書解題　サー・シォードーア・ジャンセン著一千七百十三年版『特に大不列顛及び仏蘭西間の通商に適用せられたる貿易の一般準則』　高橋誠一郎　二九四
三三九　リカード直後に於ける其の分配理論に対する英国経済学者の修正意見　高橋誠一郎　二九五
三四〇　ブライスの説教「愛国心」を契機とするフランス革命論争の序幕（英国急進運動とフランス革命）　浜田恒一　二九六
三四一　古版経済書解題　シモンド・ヅ・シスモンディの『経済学新原理』其の他　高橋誠一郎　二九一
三四二　分配論以前　高橋誠一郎　二九六
三四三　古版経済書解題　ジェームズ・アンダーソンの『国民的勤勉に就いての考察』　高橋誠一郎　二九八
三四四　二元的経済組織論——資本主義的経済生活に於ける経済組織としての公共経済に就て——　永田清　二九一〇
三四五　古版経済書解題　農業保護問題に関するマルサス及びリカードオの諸小冊子　高橋誠一郎　二九一〇
三四六　古版経済書解題　ジョン・レーの『経済学の主題に関する一定新原理の叙述』　高橋誠一郎　二九一三
三四七　フイジオクラアト直前の重農主義運動——特にエルベールを中心として　下田博　三〇一
三四八　国民主義経済学　高橋誠一郎　三〇一一
三四九　古版経済書解題　ウィリアム・パターサン著一千七百〇一年版『商務院設立の提案及び理由』　高橋誠一郎　三〇二
三五〇　古版経済書解題　サー・エドワード・ウエスト著一千八百十五年版「土地に対する資本の適用に関する論文」　高橋誠一郎　三〇三
三五一　経済学者としてのジェームズ・ミル　高橋誠一郎　三〇五
三五二　古版経済書解題　ルイス・ロバート著一千六百四十一年版『外国貿易論』　高橋誠一郎　三〇七
三五三　本居宣長の社会経済思想——国家運動の勃興——　野村兼太郎　三〇八
三五四　古版経済書解題　ジョン・ラムジィ・マカラックの一千八百二十四年版『経済学の発生、進歩、特殊目的及び重要性』並びに一千八百二十五年版『経済原論』　高橋誠一郎　三〇八
三五五　古版経済書解題　フランシス・プレース著一千八百二十二年版『人口原理の例証』　高橋誠一郎　三〇九
三五六　古版経済書解題　サー・エドワード・ウエスト著一千八百二十六年版『穀物の価格と労働の賃銀』　高橋誠一郎　三〇一〇
三五七　古版経済書解題　一千七百五十年版アンドリュー・フック著『国債論』　高橋誠一郎　三〇一一
三五八　古版経済書解題　一千六百七十四年版リチャード・ヘインズ著『防貧論』　高橋誠一郎　三一一
三五九　古版経済書解題　ジョン・クック著一千六百四十八年版『唯一緊要事、一名、貧民の訴訟』　高橋誠一郎　三一三
三六〇　第十九世紀英国反正統派経済学　高橋誠一郎　三一四
三六一　古版経済書解題　ジェーカップ・ワ

部門別目録

ンダーリント著一千七百三十四年版『銀子は何事にも応ずる』　高橋誠一郎　三六
三六二　幕末における代表的経済論者　佐藤信淵　野村兼太郎　三八
三六三　ジョン・スチュアート・ミルの富の定義　高橋誠一郎　三八
三六四　古版経済書解題　ヴィルヘルム・フォン・ホルニック著一千六百八十四年版『唯だ意図すれば、墺太利は万国に優越するを得可きである』　高橋誠一郎　三九
三六五　古版経済書解題　サー・マシュー・デッカー著一千七百四十四年版『外国貿易衰頽の原因に関する試論』　高橋誠一郎　一〇
三六六　徳川時代の農業論　野村兼太郎　二
三六七　シスモンディの思想過程について　永田清　三
三六八　維新以前における領土拡張論——わが国大陸政策発展史の一節——　加田哲二　四
三六九　第十七世紀経済文献展覧会目録　三辺清一郎　六
三七〇　古版書解題　一千六百八十二年版神学博士ギルバート・バーネット著『英国王座裁判所長サー・マシュー・ヘールの生涯』　高橋誠一郎　三
三七一　古版経済書解題　一千七百五十七年版マラッカイ・ポストルスウェイト著『大不列顛の真体制』　高橋誠一郎　七
三七二　古版経済書解題　一千八百〇八年版シャール・フーリエ著『四運動の理論』其の他　高橋誠一郎　八
三七三　古版経済書解題　一千八百二十四年版ウィリアム・タムソン著『人間の幸福に資すること最大なる富の分配の原理に関する研究』其の他　高橋誠一郎　一〇
三七四　カッセルの経済本質論について　千種義人　一〇
三七五　明治初頭に於ける保護貿易思想と E. P. Smith の来朝　江波戸靖　二
三七六　古版経済書解題　一千八百三十二年版ヴィルヘルム・フォン・ヘルマン著『国家経済研究』　高橋誠一郎　一
三七七　景気変動論前史　武村忠雄　三
三七八　クールノー「富の理論」の出版百年に際して　寺尾琢磨　三
三七九　古版経済書解題　ジョン・グレー著一千八百四十八年版『貨幣の本質及び効用に関する講義』　高橋誠一郎　三
三八〇　一千五百八十一年版ダブルユー・エス・ヂェントルマン著『種々なる人々の有する目下の不平の簡略なる検討』　高橋誠一郎　一
三八一　本多利明の経済開発論　野村兼太郎　三
三八二　第十九世紀前半英国社会主義学説の対抗理論として発達を見たる限界効用学説の先蹤　高橋誠一郎　三
三八三　経済名著解題　ウィリアム・スタンリイ・ジェヴォンズ著『石炭問題』　高橋誠一郎　四
三八四　希臘及び羅馬経済学（ギリシャ・ラテン学会発会記念公開講演会講演——昭和十四年四月二十七日、慶應義塾大学教室に於いて）　高橋誠一郎　五
三八五　古版経済書解題　一千七百八十五年版サー・ジョン・シンクレア著『英帝国公収入史』　高橋誠一郎　六
三八六　アントアンヌ・オーギュスタン・クールノーの片影　三辺清一郎　七
三八七　古版経済書解題　一千六百六十九年版匿名氏著『自国貨物の改良、特に又羊毛の加工に由る英吉利の利益主張』　高橋誠一郎　八
三八八　効用価値学説史の一節　高橋誠一郎　一〇
三八九　古版経済書解題　一千七百七十六年版エチイエンヌ・ボンノー・ヅ・コンディヤック著『相互的関係に於いて考察せられたる商業と政治』　高橋誠一郎　一一
三九〇　エドウヰン・R・A・セリグマン教授逝く　三辺清一郎　一三
三九一　経済文献解題　一千八百八十三年版フランシス・デーヴィ・ロング著『ヂョーヂ氏の「進歩と貧困」及びミル氏の賃銀理論の批判的検討』　高橋誠一郎　一三
三九二　経済名著解題　一千八百八十三年版ヘンリイ・シヂウィック著『経済原論』　高橋誠一郎　一
三九三　海保青陵の経済論　野村兼太郎　四
三九四　古版経済書解題　一千七百五十三年版ロバート・ウォレス著『古代及び現代に於ける人類の数に関する論述』　高橋誠一郎　四
三九五　アダム・スミスと国民主義経済学（アダム・スミス歿後一百五十年記念講演会講演——昭和十五年六月十七日、慶應義塾大学大講堂に於いて——）　高橋誠一郎　四
三九六　アダム・スミス書誌　高橋誠一郎　六
三九七　正価思想史概観　三辺清一郎　九
三九八　古版経済書解題　一千六百十五年版ロバート・キール著『トレーヅ・イングリース』　高橋誠一郎　一〇
三九九　桜田虎門の経済論　野村兼太郎　二

部門別目録

四〇〇　古版経済書解題　一千八百二十六年版ナッソー・ウィリアム・シィニィオアの『経済学序講』　高橋誠一郎　三五二
四〇一　古版経済書解題　一千七百〇七年版「貿易の繁昌を禱る者」著『貨幣及び為替概論』　高橋誠一郎　三五六
四〇三　古版経済書解題　一千八百三十一年版リチャード・ジョーンズ著『富の分配及び課税の諸源泉に関する一論、第一部地代』　高橋誠一郎　三五七
四〇三　経済的自給主義思想史概観　高橋誠一郎　三五九
四〇四　古版経済書解題　一千八百年版トマス・ロバアト・マルサス著『目下の食料高価原因の攻究』　高橋誠一郎　三五九
四〇五　利潤思想史概観　高橋誠一郎　三六一
四〇六　古版経済書解題　一千七百七十五年版ジャック・ネッケル著『穀物法規及び穀物商業論』　高橋誠一郎　三六二
四〇七　古版経済書解題　チャールズ・ダヴェナント著一千六百九十五年版『戦費調達の手段方法に関する一試論』　高橋誠一郎　三六三
四〇八　古版経済書解題　一千六百十五年版サー・ダッドリィ・ディッグズ著『貿易の擁護』　高橋誠一郎　三六五
四〇九　経済学名著解題　一千八百五十三年初版カール・クニース著『歴史的方法の見地よりする経済学』　高橋誠一郎　三六六
四一〇　沼津版『経済説略』　三辺清一郎　三六七
四一一　現代経済学理論概況（昭和十七年六月二十五日慶應義塾経済学会講演）　高橋誠一郎　三六八
四一二　国富論書誌——アダム・スミス書誌続篇——　三辺清一郎　三六九
四一三　古版経済書解題　一千八百十一年版ディ・ボアロー著『経済学学習の手引』　高橋誠一郎　三九
四一四　古版経済書解題　一千八百三十三年版ヂョーヂ・ポーレット・スクロープ著『経済学の諸原理』　高橋誠一郎　三九一
四一五　古版経済書解題　一千八百十五年版ロバート・トーレンズ大佐著『対外穀物交易論』　高橋誠一郎　三九一
四一六　W・S・ジェヴォンスの『石炭問題』　寺尾琢磨　三九六
四一七　古版経済書解題　一千八百二十三年版トマス・ロバート・マルサス著『価値の尺度』　高橋誠一郎　三九八
四一八　消費経済思想史概観　高橋誠一郎　三九九
四一九　翻訳『国富論』——国富論書誌続篇　三辺清一郎　三九九
四二〇　古版経済書解題　一千八百四十年版ウィリアム・アトキンソン著『経済原理』　高橋誠一郎　三七一
四二二　経済活動動機思想史概観　高橋誠一郎　三八二
四二三　経済表の生成発展　渡辺建　三八二
四二四　『内外政党事情』に就て——改進党の一機関として——　西田長寿　三八五
四二五　アダム・スミス書誌拾遺　三辺清一郎　三八六
四二六　地代思想史概観　高橋誠一郎　三八六
四二七　経済表の省略化と其範式　渡辺建　三八八
四二八　西洋経済古書解題　一千六百四十年版サー・ラッフ・マディソン著『英国の瞥見展望』　高橋誠一郎　三九二
四二九　北欧学派利子論の分析　鈴木諒一　三九四
四三〇　西洋経済古書解題　一千八百十六年版ジェーン・マーセット夫人著『経済学に関する会話』　高橋誠一郎　三九六
四三一　重商主義と絶対王政　高橋誠一郎　四〇一
四三二　荘戸政以の『遡言』　野村兼太郎　四〇四
四三三　三浦梅園の経済論　野村兼太郎　四〇七
四三四　英国近代社会の生成と賃銀理論——賃金学説史序説(一)——　黒川俊雄　四一一
四三五　重商主義解体期における科学的賃銀理論の諸萌芽——賃銀学説史序説(二)——　黒川俊雄　四一二
四三六　重商主義解体期における科学的賃銀理論の諸萌芽——賃銀学説史序説　黒川俊雄　四一二
四三七　ケネーの社会思想史的一考察　植木憲二　四一三
四三八　アダム・スミスと社会主義者——東京大学におけるアダム・スミスの会発会式講演速記——　高橋誠一郎　四一一
四三九　リカードオの不変の価値尺度論　遊部久蔵　四一四
四四〇　思想史研究の諸問題　野村兼太郎　四一五
四四一　馬場辰猪小伝（上）　西田長寿　四一七
四四二　馬場辰猪小伝（下）　西田長寿　四一八
四四三　価値判断に関するわが国の学説について　気賀健三　四一六
四四四　スミスのいわゆる「初期未開の社会状態」について　遊部久蔵　四一七
四四五　聖トーマスの財産論について　平井新　四一三
四四六　方法論史上におけるカール・メンガーの役割　服部成三郎　四一六
四四七　古典学派に於ける「賃労働」問題の分析視角——アダム・スミス——　井村喜代子　四一一
四四八　安藤昌益の身元と遺稿につきて　渡辺大濤　四一三
四四九　D・リカードの「賃労働」問題の分析視角　井村喜代子　四一四
四五〇　ケインズ理論と古典派理論の比較

部門別目録

——ルッツの所論に鑑みて——　鈴木諒一　四九七
四五一　古典学派の崩壊と「賃労働」分析の転換——J・S・ミル——　井村喜代子　五〇二
四五二　安定均衡の経済表に就て——ウーグ博士の『フランソワ・ケネーの経済表』を中心として——　渡辺建　五〇二
四五三　ケネー経済表（原表）の疑義に就て——坂田太郎教授の『ケネー経済表』の「訳者解説」を中心として——　渡辺建　五〇六

社会思想　A五〇一—五五三

五〇一　ブランキの階級闘争説とプロレタリヤ独裁説　平井新　五二二
五〇二　サン・シモンの宗教論——Nouveau christianisme　小泉順三　五二三
五〇三　明治初期の社会主義　加田哲二　五二四
五〇四　フランス革命以前の知識階級——フランス革命と知識階級への序説——　小泉順三　五二六
五〇五　オウェンの社会思想　土田玉雄　五二六
五〇六　明治二十年前後の社会問題に関する自由党左翼の見解——明治二十年代の社会思想史の一節——　加田哲二　五二七
五〇七　フランス革命時代の知識階級　小泉順三　五二六
五〇八　Jean Bodin と其時代　永田清　五二六
五〇九　カベェの共産主義体系　平井新　五二六
五一〇　ドイツ国民社会主義の経済観　加田哲二　五二七
五一一　シドニイ・ヱッブのソヴェト露西亜観　小泉信三　五二七
五一二　フランス社会思想史概論文献数種　永田清　五二七
五一三　ファッシズム・イデオロギーの批判的方面——その自由主義・民主主義・社会主義批判——　加田哲二　五二七
五一四　明治初年の新旧思想対立への序曲　加田哲二　五二八
五一五　国民社会主義（ナチス）文献　加田哲二　五二八
五一六　ナチス文献雑考——「国民社会主義（ナチス）文献」補遺　加田哲二　五二九
五一七　マブリイの社会思想　平井新　五二九
五一八　現代の全体主義国家論——ムッソリーニとヒットラアの国家論——　加田哲二　五二九
五一九　ルイ・ブランの社会主義体系　平井新　五二九
五二〇　ジャン・メリエとその『遺書』・　平井新　五三〇
五二一　明治初期社会経済思想史への序論　加田哲二　五三〇
五二二　明治初期社会経済思想文献大要　加田哲二　五三〇
五二三　教会法の理論として現はれたる自然法の観念　打村鉱三　五三〇
五二四　ファッシズムと自由主義　加田哲二　五三〇
五二五　国学の社会思想史的意義　野村兼太郎　五三一
五二六　モレリイ『自然法典』と其思想的背景　平井新　五三一

五二七　古版経済書解題　仏蘭西共和国第三年版マリー・ジャン・アントアーン・コンドルセー遺著『人類精神進歩の歴史画下図』　高橋誠一郎　五三九
五二八　中国国民党の諸派と三民主義——孫文没後三民主義は如何に解釈されたか——　加田哲二　五三二
五二九　マルクスの人生論　平井新　五三四
五三〇　マルクス的思想の系譜　平井新　五三六
五三一　唯物史観に於ける「生産方法」・「生産力」の問題　平井新　五四四
五三二　社会の進化と倫理　気賀健三　五四四
五三三　フランス革命と社会主義　平井新　九八七
五三四　社会的自由主義について　気賀健三　九八七
五三五　福沢先生の学問論　野村兼太郎　九八七
五三六　基督教的共産団体　高橋誠一郎　九八七
五三七　民主主義と社会主義——気賀健三教授著「現代社会主義思想論」を読みて——　伊東岱吉　八
五三八　伊藤岱吉君の批評に答へる　気賀健三　八

部門別目録

五三九　マルクスの階級論について——一つの覚書——　平井新　一
五四〇　唯物史観と自由　気賀健三　五
五四一　社会思想史上のフランシス・ベーコン　植木憲二　七
五四二　英国功利主義の社会思想的意義——J・S・ミルの社会観に関連して——　服部成三郎　一三
五四三　シドニー・ウェッブ夫妻その生涯と業績——英国社会史の一断面——　飯田鼎　一
五四四　アリストテレスの社会思想　平井新　四
五四五　メシア思想の起源と発展　平井新　一三
五四六　「ロックの社会思想史的一考察」——所有権について——　植木憲二　七
五四七　社会思想としてのヘブライズム　平井新　一〇
五四八　ホッブス経済思想の一考察(一)——自然法とイギリス重商主義研究への序説——　梅谷泰夫　三
五四九　マルクスとスターリン　気賀健三　四
五五〇　ドイツ・ファシズムにかんする覚え書——オットー・ウィンツァ「ファシズムと戦争にたいする十二年の闘争」によせる——　飯田鼎　六
五五一　W・ゴドウィン「政治的正義」——初版と三版との差異について——　白井厚　五

五五三　十八世紀英仏社会思想の発展とウィリアム・ゴドウィン　白井厚　五〇八

五五三　バブーフの共産主義理論　平井新　五〇（一一〇）

B　統計学・計量経済学・人口論

統計学　B一〇一―一〇七

一〇一　法則に於ける必然性と蓋然性――Statistik より Stochastik への転化――　寺尾琢磨　三三

一〇二　統計比較の本質と限界について　寺尾琢磨　三七

一〇三　部分と全体――試料に於ける誤差の本質――　寺尾琢磨　三三

一〇四　統計的平均値の理論的構造　寺尾琢磨　三六

一〇五　国家政策に於ける統計の任務と限界　寺尾琢磨　三四

一〇六　社会科学及び自然科学と統計学との関聯を論ず――応用統計学の可能性に関する試論――　寺尾琢磨　三五

一〇七　統計学者としてのW・S・ジェヴォンス　寺尾琢磨　三八

計量経済学　B二〇一―二三一

二〇一　Harvard Barometer の内容の変遷　寺尾琢磨　二八

二〇二　統計的長期傾向値と理論的発展正常値　寺尾琢磨　二九

二〇三　季節変動の統計的測定に就て　寺尾琢磨　二九

二〇四　具体的需要曲線の導出に就て――H. Schultz を中心として――　寺尾琢磨　三〇

二〇五　生産指数の諸問題　寺尾琢磨　三七

二〇六　国民所得の統計的解析　鈴木諒一　三九

二〇七　経営不平等系数に就て　鈴木諒一　三九

二〇八　動態経済学と物価指数　鈴木諒一　四〇

二〇九　計量経済学の現状について　鈴木諒一　四一

二一〇　数学線に就いて　安川正彬　四一（一一二）

二一一　数学線導出の簡便法　安川正彬　四二

二一二　支出拡張線について　辻村江太郎　四三（一六五）

二一三　エコノメトリックスの本質――誘導形法に関する若干の疑問――　鈴木諒一　四四

二一四　「線型選好場模型」の近似度検定に関する一試論　辻村江太郎　四四（一九八）

二一五　賃銀指数の意味と算定　小尾恵一郎　四五

二一六　絶対消費の図式とその具体化　辻村江太郎　四五

二一七　具体的消費函数の発達について　鈴木諒一　四五

二一八　企業生産函数の分析――Linear Programming の立場から――　尾崎巌　四六

二一九　蓄積、生産要素相対価格及び利用度の構造的関係――生産函数の測定と分配率の再考を含めて――　小尾恵一郎　四六

二二〇　主成分分析（Principal Components）の経済分析への応用　佐藤保　四七

二二一　産業生産性の計測――製紙産業への適用――　尾崎巌　四七

二二二　推定値の性質と許容限界　佐藤保　四八

二二三　生産性の変化と所得分布――アグレゲーション解決のために――　鈴木諒一　四八

二二四　生産構造の計測と与件――生産函数計測における工学的資料の援用について――　小尾恵一郎　四九

二二五　経済学的生産函数の計測――産業内規模別企業の異質性に関する考察を含めて――　尾崎巌　四九

二二六　動的消費者行動理論確立のために――時間的変位を含む構造推定の試み――　佐藤保・辻村江太郎　四九

二二七　労働供給に関する覚書　辻村江太郎　四九

二二八　生産性指数と分配の問題　鈴木諒一　五〇

二二九　労働需要の機構――生産函数・生産者行為・賃金格差の関係を含めて　尾崎巌　五〇

二三〇　日本産業構造の問題点　鈴木諒一　五〇

二三一　クロス・セクション消費線の非直線性と習慣仮説　辻村江太郎　五〇

人口論　B三〇一―三一五

三〇一　人口減退とその経済的意義　寺尾琢磨　二六

三〇二　ナチス人口政策概論　寺尾琢磨　三〇

三〇三　仏蘭西人口の危機と対策　寺尾琢磨　三一

三〇四　断種法の理念とその人口政策的意義　寺尾琢磨　三三

三〇五　人口性比の三形態　寺尾琢磨　三四

三〇六　優生学的人口政策の消極的と積極面　寺尾琢磨　三四

三〇七　出生減の原因と対策の基調　寺尾琢磨　三五

三〇八　マルサス人口論に現はれた南海諸島　寺尾琢磨　三六

三〇九　過剰人口の概念について　寺尾琢磨　三九

三一〇　国民優生法改造私案　寺尾琢磨　四〇（一一〇）

三一一　アメリカの見た日本人口問題　寺尾琢磨　四四（一一一）

三一二　家族計画とその人口政策的意義　寺尾琢磨　四七

三一三　人口政策の概念を規定する　寺尾琢磨　四八

三一四　本邦経済資料解説㈠　辻村江太郎　五〇

三一五　人口老化を巡る諸問題　寺尾琢磨　五〇（一一〇）

C　経済史

総論　C一〇一―一〇六

一〇一　歴史学方法論の一面　高村象平　二五

一〇二　ヴィンデルバントに於ける歴史学と

歴史の発展
一〇三　経済史研究序説の一章　高村象平　二六一
一〇四　経済発展段階説の構造——経済史研究序説——　高村象平　二六五
一〇五　「大塚」史学における「二つの道」　豊田四郎　四〇（八七九八）
一〇六　資本主義技術の史的構造　野口祐　四五

日本　C二〇一—三一三

二〇一　荘内藩の与内制度について　国分剛二　二五一
二〇二　経済史の意義について　野村兼太郎　二七二
二〇三　旗本困窮の過程について　野村兼太郎　二八一
二〇四　明治初年に於ける諸職人の労働事情——鉄道寮雇傭建築労働者の賃銀及労働時間に就いて——　高村象平　二八一
二〇五　大名貸について——その実例——　野村兼太郎　二九二
二〇六　徳川後期に於ける農村人口の一例（概論）——下野国都賀郡上泉村　野村兼太郎　二九六
二〇七　徳川時代に於ける農村経済の一端　野村兼太郎　二九一〇
二〇八　羽田海面稼方に関する紛争（社会経済史資料紹介一）　野村兼太郎　二九一一
二〇九　播州一揆聞書（社会経済史資料紹介）　野村兼太郎　二九一三
二一〇　淀橋町米穀問屋仲間古記録（社会経済史資料紹介）　野村兼太郎　三〇一
二一一　護持院百姓門訴の判決（社会経済史資料紹介）　野村兼太郎　三一二
二一二　六郷川渡船について（社会経済資料紹介）　野村兼太郎　三〇二
二一三　商法司と通商司の改廃について　野村兼太郎　三〇三
二一四　播州百姓一揆拾遺（社会経済史資料紹介）　伊東弥之助　三〇五
二一五　上総国三ッ作村百姓越訴（社会経済史資料紹介）　野村兼太郎　三〇五
二一六　天保八年の囲穀令について（社会経済史資料紹介）　野村兼太郎　三〇六
二一七　牛久宿助郷差村騒動（社会経済史資料紹介）　野村兼太郎　三〇七
二一八　天保の貸借帳消令の実例（社会経済史資料紹介）　野村兼太郎　三〇九
二一九　安濃津騒動記（社会経済史資料紹介）　野村兼太郎　三一〇
二二〇　常州真壁郡大国玉村百姓騒動（社会経済史資料紹介）　野村兼太郎　三一〇
二二一　維新当時における品川宿の助郷（社会経済史資料紹介）　野村兼太郎　三一三
二二二　地主と地借——武蔵国八町目村一件（社会経済史資料紹介）　野村兼太郎　三一二
二二三　見沼通船と小山田与清（社会経済史資料紹介）　野村兼太郎　三一三
二二四　見沼通船と御定運賃（社会経済史資料紹介）　野村兼太郎　三一四
二二五　維新直前における百姓一揆の報告（社会経済史資料紹介）　野村兼太郎　三一五
二二六　領主の困窮と村方の負担（社会経済史資料紹介）　野村兼太郎　三一六
二二七　商品としての浮世絵版画　野村兼太郎　三一一
二二八　村騒動の一例——武州橘樹郡本月村（社会経済史資料紹介）　高橋誠一郎　三一一
二二九　下総生実領助郷騒動（社会経済史資料紹介）　野村兼太郎　三一三
二三〇　旗本の分度生活（社会経済史資料紹介）　野村兼太郎　三一四
二三一　外交文書を通じて見たる幕末の長崎　野村兼太郎　三一三
二三二　明治維新直後の長崎　野村兼太郎　三一五
二三三　徳川時代村落研究序説——その静態的研究——　野村兼太郎　三一九
二三四　徳川時代村落研究序説——その動態的研究——　野村兼太郎　三一〇
二三五　江戸下肥取引について（社会経済史資料紹介）　野村兼太郎　三一四
二三六　日光御用船引人足出入一件（社会経済史資料紹介）　野村兼太郎　三一一
二三七　五人組帳の形式　野村兼太郎　三一四
二三八　五人組帳の前書について　野村兼太郎　三一三
二三九　五人組帳を通じて見たる五人組　野村兼太郎　三一五
二四〇　江戸の干鰯〆粕市場　伊東弥之助　三一七
二四一　関東漁業の揺籃期　羽原又吉　三一六
二四二　商家家訓の一例（社会経済史資料紹介）　野村兼太郎　三一三
二四三　関東漁業の黎明期　羽原又吉　三一四
二四四　村明細帳と農村の貨幣経済化　野村兼太郎　三一六
二四五　村明細帳に現れたる農村生活　野村兼太郎　三一七
二四六　徳川後期に於ける絵画の商品化と浮世絵師　高橋誠一郎　三一一
二四七　幕末農間渡世調査の意義　野村兼太郎　三一二
二四八　「拾芥甫記」について（社会経済史資料紹介）　野村兼太郎　三一七
二四九　入会地と新田開発（社会経済史資料紹介）　野村兼太郎　三一三
二五〇　日本蜃族考　野村兼太郎　三一八
二五一　江戸材木仲買仲間記録（社会経済史資料紹介）　野村兼太郎　三一一
二五二　問屋と仲買——江戸材木商（社会経済史資料紹介）　野村兼太郎　三一二
二五三　連雀町、連雀座、連雀商人　野村兼太郎　三一九
二五四　徳川封建制度の特質　伊東弥之助　三一九
二五五　呉服問屋と絹買指宿（社会経済史資料紹介）　野村兼太郎　三一九

部門別目録

二五六 南鐐二朱銀の流通について　野村兼太郎　四〇　三
二五七 江戸瀬戸物問屋仲間の規定（社会経済史資料紹介）　野村兼太郎　四〇　一
二五八 俵ふるひ（内藤光備著）　解題　幸田成友　四一　六
二五九 日本真珠誌（上）　羽原又吉　四一　一
二六〇 日本真珠誌（下）　羽原又吉　四一　三
二六一 奈良時代の商業及び商人について　伊東弥之助　四一　五
二六二 享保期を中心とせる幕府徴租様式の変質について——検見春法と定免制　新保博　四一　一二
二六三 江戸時代における人口調査　野村兼太郎　四二　三
二六四 旧幕期の水産献上品と維新後の推移　羽原又吉　四二　四
二六五 会津藩の漆生産について　松尾謙介　四二　四
二六六 紀伊国潮岬会合　羽原又吉　四三　四
二六七 両組木綿問屋仲間の成立過程より見たる初期の江戸商業組織　伊東弥之助　四三　四
二六八 樋籠村の歴史——一地主の成立とその発展　服部謙太郎　四四　二
二六九 樋籠村とその周辺の治水問題——庄内古川を中心として——　島崎隆夫・金丸平八　四四　二
二七〇 樋籠村の協同研究　高村象平　四四　二
二七一 樋籠村の土地問題——地守制を繞って——　宇治順一郎・新保博　四四　二
二七二 経済史学の新展開　服部謙太郎　四四　七
二七三 日本経済史研究の一動向——「経済史学の新展開」続稿　服部謙太郎　四四　八・九
二七四 封建社会成立史論をめぐって——続「日本経済史研究の一動向」——　服部謙太郎　四四　一〇
二七五 領主制発展過程の一考察——備後国太田床に於ける一例——　服部謙太郎　四五　一
二七六 地頭領主と庄園体制——十三世紀に於ける紀伊国阿氏河庄——　服部謙太郎　四五　三
二七七 貢租に関する農民訴訟の一資料——寛保元年下野国大山村の場合——　新保博　四五　六
二七八 日本林業発達史序説　服部謙太郎　四五　八
二七九 武蔵国埼玉郡麦倉村——大庄屋小室家をめぐる問題——　服部謙太郎　四六　二
二八〇 上総国市原郡不入斗村　金丸平八・中村勝己　四六　二
二八一 武蔵国児玉郡傍示堂村——名主内野家の経営を中心として——　島崎隆夫　四六　二
二八二 近世における漁村の移住と漁場の利用、支配の関係について　速水融　四六　七
二八三 近世における一漁村の人口動態——紀伊国牟婁郡須賀利浦——　速水融　四六　一三
二八四 私有林に関する試論（一）——一山林地主の生態について——　金丸平八　四七　一
二八五 私有林に関する試論（二）——一山林地主の生態について——　金丸平八　四七　二
二八六 都市近郊村の諸問題——武蔵国豊嶋郡角筈村——　速水融　四七　三
二八七 天保年間深谷宿助郷出入　速水融　四七　三
二八八 夫銭出入一件——武蔵国葛飾郡藤塚村——　金丸平八　四七　三
二八九 利根川筋河岸場紛争——本庄宿外港としての一本木河岸および山王堂河岸——　島崎隆夫　四七　三
二九〇 村落聯合——組合村について——武蔵国足立郡染谷村——　島崎隆夫　四七　三
二九一 新田開発と惣村持田地——上総国市原郡菊間村——　宇尾野久　四七　三
二九二 武州一揆と農兵　安沢秀一　四七　三
二九三 大坂信用制度の基盤——紙問屋小嶋屋七兵衛の例——　野村兼太郎　四七　四
二九四 村明細帳を通じてみた伊勢の農村と都市——四日市宿を中心として——　速水融　四七　五
二九五 林業史研究（一）——明治四〇年の森林法改正を中心として——　金丸平八　四七　五
二九六 林業史研究（二）森林組合の性格とその成果について　金丸平八　四七　六
二九七 村明細帳を通じてみた近世中期の一漁村——志摩国英虞郡船越村——　速水融　四七　七
二九八 杉本茂十郎の研究——菱垣廻船積株仲間の成立——　伊東弥之助　四七　九・一〇
二九九 宗門改帳より壬申戸籍へ（一）——維新期の人口調査とその一例——　速水融　四七　一三
三〇〇 都市近郊村の農業経営に関する一考察　速水融　四八　二
三〇一 旗本領における支配の変化について——上総国市原郡妙香村——　金丸平八　四八　二
三〇二 幕末期における村落窮乏の一例——武蔵国多摩郡沢井村——　志田節子　四八　二
三〇三 商人意識の一考察——関東十在郷商人（武蔵国児玉郡本庄宿戸谷家）の家訓を中心として——　島崎隆夫　四八　二
三〇四 近世村落形成期における新開と入会——武蔵国多摩郡連光寺村の場合——　安沢秀一　四八　二
三〇五 宗門改帳より壬申戸籍へ（二）——維新期の人口調査とその一例——　速水融　四八　九
三〇六 近世初期の検地と本百姓身分の形成——慶長六年紀州検地帳の研究——　速水融　四九　二
三〇七 私有林を繞る争論の一例——下野国都賀郡大久保村——　金丸平八　四九　二
三〇八 関東地方一農村に成立をみた農書——田村吉茂著「農業自得」を中心として　島崎隆夫　四九　二
三〇九 近世村落形成期における年貢について（一）——武蔵国多摩郡連光寺村の場合——　安沢秀一　四九　二
三一〇 近世関東における農村奉公人賃銀の

部門別目録

研究
三一 近世後期における農書と物価　速水融 五〇
三二 近世村落形成期における年貢負担者について——武州多摩郡連光寺村「老農」形成の基盤についての若干の考察　島崎隆夫 五〇
三三 安沢秀一 五〇
三四 島崎隆夫 五〇

外国　C四〇一—四七二

四〇一 植民政策と自由主義——英国植民政策史上に於ける自由主義の時代について——　伊藤秀一 三五
四〇二 英蘭児童労働史研究上の一寄与——ロブスンの新著を読みて——　高村象平 三五
四〇三 十九世紀に於ける欧米の経済発展——ノオルスの遺著を読みて——　高村象平 三六
四〇四 ハンザ同盟に於ける中世的要素　高村象平 三七
四〇五 英国急進運動第一期概観——その発端よりフランス大革命勃発時まで　浜田恒一 三七
四〇六 中世西欧に於ける商業の復活——主としてピレンヌの所説に就いて——　高村象平 三七
四〇七 ペリクレスの大工事に就きての社会経済史的考察　高橋誠一郎 三七
四〇八 新マーカンチリズム——仏蘭西資本主義起源考——　下田博 三七
四〇九 一七八九年のフランスに於ける貴族階級　小泉順三 三八
四一〇 フランス革命に於ける「人権の宣言」の解釈　小泉順三 三八
四一一 リキニウス法前後——羅馬社会闘争史研究——　高橋誠一郎 三八
四一二 十六世紀ネエデルラントのカルヴィン主義——近世欧羅巴資本主義成立期に於ける宗教思潮——　高村象平 三八
四一三 マンチェスタアに於ける社会・経済的調査（J. S. Ashton, Economic and Social Investigations in Manchester 1833-1933. pp. xii., 179. 1934.）　野村兼太郎 三八
四一四 ハミルトン教授の西班牙に於ける価格革命　高村象平 三九
四一五 海峡植民地経済史資料の若干　高村象平 三九
四一六 英国資本主義の成立過程序論　野村兼太郎 三〇
四一七 中世基督教会と婚姻——古代中世に於ける自然法理とその実証法的適用
四一八 ライプチヒと市郵組合史　打村鉱三 三〇
四一九 和蘭商業資本のバルト海進出に就いて　三井高陽 三〇
四二〇 古代の土村所有並測地記録——（紀元前四—二千年代　シュメルバビロン時代）——　高村象平 三九
四二一 ブルウヂュ市場に於けるハンザと和蘭商人　井上芳郎 三一
四二二 シュメル時代の都市構成　高村象平 三二
四二三 独逸ハンザ衰退期に於けるベルゲンの商業に就いて　井上芳郎 三二
四二四 商業革命時代の独逸ハンザ　高村象平 三三
四二五 中世独逸の建設都市と商人仲間——特にゴスラアルについて——　高村象平 三三
四二六 独逸騎士団について——その成立・活動・衰退——　高村象平 三四
四二七 中世諸威の農地世襲——グゥラ民会法律書を中心として——　高村象平 三四
四二八 バルト海諸都市の建設事情——独逸ハンザ成立前史の一齣——　高村象平 三五
四二九 バルト海都市の建設と都市領主——リュベック市について——　高村象平 三五
四三〇 市域設定と市民の土地取得——リュベック市についての暫定的考察——　高村象平 三六
四三一 中世チューリヒ市の統治者と政策　高村象平 三六
四三二 東独逸植民達成の諸条件　高村象平 三七
四三三 独逸ハンザと都市同盟　高村象平 三七
四三四 中世後期独英商館貿易について　高村象平 三八
四三五 中世後期独逸都市の意義　高村象平 三九
四三六 ホームステッド法制定前——アメリカ土地制度史の一齣——　高村象平 四〇
四三七 中世西欧の国家構造　高村象平 四一
四三八 アメリカ植民地財政の一齣——マサチュセッツ植民地について　金丸平八 四二
四三九 ジェファスンと農業　木村喜久弥 四三
四四〇 アメリカ産業資本の形式——鉄工業の性格と系譜——　中村勝己 四三
四四一 白耳義・和蘭経済史に関する近時の業績　高村象平 四四
四四二 第十六世紀アンヴェルスにおける商業と道徳　渡辺国広 四四
四四三 王領植民地下のマサチュセッツ財政　金丸平八 四五
四四四 独逸ハンザ貿易と諸威経済の衰退　高村象平 四五
四四五 カール大帝治下の Conventus generalis の性格　宇尾野久 四五
四四六 「バシレェイア」と古ゲルマンの「グルンドヘルシャフト」の異同性について——ホーメロス、タキトウスを中心として——　宇野尾久 四五
四四七 エジプト農業のギリシャ化に対する通説への反省（M・シュネーベルのパピルス研究を中心として）　宇尾野久 四六

部門別目録

四四八　故マルク・ブロック教授の歴史理論について——遺著「歴史学のための弁明」の紹介その一——　渡辺国広　四六四
四四九　故マルク・ブロック教授の歴史理論について——遺著「歴史学のための弁明」の紹介その二——　渡辺国広　四六六
四五〇　ブロコピウス「アネクドータ」の経済記事　宇尾野久　四六七
四五一　「外科医ヴィレルメの眼に映じたフランス織物労働者」　渡辺国広　四六一〇
四五二　アメリカ植民地工業の歴史的形態　中村勝己　四六一二
四五三　中世における金融取引——ブルージュ市場に関する近著の紹介——　渡辺国広　四六一二
四五四　『コーデックス・ラウレスハメンシス』におけるマンキピア　宇尾野久　四七四
四五五　ルュトゲ著「社会経済史における第十四・五世紀」　渡辺国広　四七四
四五六　中世リューネブルク井塩の取引について　高村象平　四七六
四五七　ローマの農政——Cicero, de lege agraria を中心として——　宇尾野久　四七一一
四五八　カール大帝のテスターメントウム　宇尾野久　四八一
四五九　西ドイツ中世における "Bauernstum" の形成——Codex Laureshamensis を中心として——　宇尾野久　四八一〇
四六〇　"De ministerialibus"——C. L. における展開——　宇尾野久　四九六
四六一　資財帳範例雑記——Brevium Exempla-Miszellen——　宇尾野久　四九九
四六二　マルク・ブロックと歴史　渡辺国広　四九一二
四六三　アメリカ土地投機に関する一研究——Holland Land Company の場合——　中村勝己　五〇一
四六四　最近における物価史研究の動向　渡辺国広　五〇一
四六五　ドイツ農民戦争の歴史的意義（上）　寺尾誠　五〇三
四六六　いわゆる中世的自由について　宇尾野久　五〇五
四六七　ドイツ農民戦争の歴史的意義（中）　寺尾誠　五〇六
四六八　ロルシュ帝国賃子帳——Lorscher Reichsurbar——　宇尾野久　五〇六
四六九　マルク・ブロック——人と業績——　渡辺国広　五〇七
四七〇　ポリネシア人のハワイ移住について　野村兼太郎　五〇一〇
四七一　リューベック市民の土地購入——第十四世紀後半のザクセン＝ラウエンブルク公領——　高村象平　五〇一〇
四七二　ドイツ農民戦争の歴史的意義（下の一）　寺尾誠　五〇一一

D 経済地理

経済地理　D一〇一—一二〇

一〇一　経済地理学の実際的任務に関する一考察　小島栄次　一元九
一〇二　地理学の本質と地理的環境に就いて——経済地理学方法論に於ける一断想——　小島栄次　二〇一
一〇三　経済地理学に於ける自然環境観察の意義及び手続きに就いて　小島栄次　二〇九
一〇四　経済地理学的観察の対象としての経済現象に就いて　小島栄次　二一六
一〇五　資源問題考究の若干の基礎　小島栄次　二一一
一〇六　経済地理学に於ける文化環境観察の手続きに就いて　小島栄次　二一五
一〇七　地理的環境論の諸問題　小島栄次　二一一
一〇八　古代及び中世の西洋に於ける地理学——その史的素描——　小島栄次　二一九
一〇九　近世に於ける西洋地理学——その史的素描——　小島栄次　二二六
一一〇　地理学的研究の対象と課題　小島栄次　二二一〇
一一一　日本地理区の研究と国土計画　小島栄次　二二一
一一二　再び日本地理区の研究と国土計画に就いて　小島栄次　二二五
一一三　東亜に於ける棉花需要量に就いて　小島栄次　二二六
一一四　欧洲西北部の農業事情と農業政策——高水準経済の農業諸問題——　小島栄次　二二七
一一五　東亜建設の自然的条件に関する若干の考察——殊に気候を中心として　小島栄次　二二
一一六　米国経済の一側面——その地域的構造に就いて——　小島栄次　二四〇
一一七　英国経済の地理的構造　小島栄次　二四一
一一八　人文地理学に対する大学入試受験生の考え方に就いて　小島栄次　二四六
一一九　地理学の課題と領域に就いて　小島栄次　二四六
一二〇　経済分析における地方経済観察の意義に関する若干の考察　小島栄次　二五〇

E 世界経済（貿易・海外事情を含む）

世界経済　E一〇一—一七二

一〇一　帝国主義の概念に就て　伊藤秀一　一六一
一〇二　植民政策と帝国主義——植民政策研究序説——　伊藤秀一　一六一〇
一〇三　ソヴエト五個年計劃概論　小泉信三　一六一〇

一〇四 支那労働組合法の歴史一斑 及川恒忠 一六一〇
一〇五 ジョン・ヘイの「門戸開放」宣言——支那に於けるアメリカ帝国主義活動の一齣—— 伊藤秀一 一七二
一〇六 満洲に於ける「弗外交」の発端 伊藤秀一 一七七
一〇七 日英通商問題概観 浜田恒一 一七九
一〇八 ソヴェート租税政策概説 高木寿一 一七一〇
一〇九 「国際借款団」と米国 伊藤秀一 一八一
一一〇 ソヴェート五ケ年計画とその技術論 藤林敬三 一八三
一一一 ソヴェート同盟に於ける「一国社会主義建設論」への思想的発展——コミンテルンの崩壊過程の一観察—— 橋本勝彦 一八五
一一二 正統学派貿易理論 岩田仞 一九二
一一三 ナチスの抬頭及びその経済政策の社会経済的基礎 加田哲二 一九五
一一四 国際価格理論——正統学派貿易理論研究—— 岩田仞 一九八
一一五 輸入割当制度 岩田仞 一九一三
一一六 貿易理論の発展と貿易政策原理——正統学派貿易理論研究—— 岩田仞 二〇一〇
一一七 アメリカ聯邦の国家的性格と其の財政及び経済 東井金平 二一一
一一八 貿易理論と貨幣理論との論理的関係——正統学派貿易理論研究—— 岩田仞 二一七
一一九 植民地原料資源問題に関する一考察 山本登 二一六
一二〇 最近日仏貿易関係資料——「日本経済発展の対仏影響」(Les conséquences du développement économique du Japan pour l'Empire Français.)—— 下田博三 九
一二一 わが国対外経済政策の決定における社会的並に政治的要因 加田哲二 二二二
一二二 大英ブロック経済に於ける工業原料の自給性 山本登 二二四
一二三 ブロック経済の本質およびその発展 加田哲二 二二六
一二四 大英帝国の食糧自給性 山本登 二二二
一二五 少数民族問題——ヨーロッパにおける少数民族としてのドイツ人問題 加田哲二 二二三
一二六 辺境政策と国族理論——中国々民党の辺境理論と三民主義—— 加田哲二・小林宗三郎 二二四
一二七 台湾経済の外地的性格 山本登 二二九
一二八 新東亜指導理論の瞥見 望月玉三 二三一〇
一二九 大陸政策の展開過程 山本登 二三一〇
一三〇 世界経済新秩序と国際経済体制 金原賢之助 二三一〇
一三一 太平洋経済戦論——アメリカの対日本経済戦争—— 加田哲二 二三一一
一三二 台湾農業再編成の問題 山本登 二三二
一三三 台湾工業化問題の検討 山本登 二三七
一三四 国民政府治下の経済概観 金原賢之助 二三九
一三五 大東亜政策の経済的課題 山本登 二三三
一三六 東亜共栄圏と貿易理論の展開 岩田仞 二三六
一三七 原料資源問題について 加田哲二 二三八
一三八 南方資源研究の諸課題 山本登 二三七
一三九 朝鮮経済「基地的性格」の一断面 山本登 二三八
一四〇 支那総人口の推定 寺尾琢磨 二三七
一四一 南方貿易の実態と特質 山本登 二三八
一四二 世界経済はどうなるか 永田清 二三九
一四三 外地経営の根本的性格——反省への一試論—— 山本登 二三九
一四四 リカルドの国際貿易理論——古典学派貿易理論研究—— 白石孝 四〇
一四五 アメリカの貿易政策と世界経済 山本登 四〇五
一四六 戦後世界植民地問題の所在点 山本登 四〇一〇
一四七 バステーブルの国際貿易理論——古典学派貿易理論研究—— 白石孝 四一四
一四八 アジア経済復興への展望 山本登 四二二
一四九 アジア貿易の分析と展望 山本登 四二三
一五〇 アジア貿易の形態とその変貌 白石孝 四二四
一五一 インターナショナリズムとソ連邦の民族政策 矢内原勝 四四七
一五二 貿易政策の効果分析を中心として——最近の文献よりの覚え書—— 白石孝 四四一〇
一五三 戦時共産主義時代の工業組織 加藤寛 四四一一
一五四 米国南部の経済に対するTVAの影響 飯島瑞子 四五七
一五五 東南アジア経済開発問題に関する一考察 山本登 四五七
一五六 国際収支の所得分析とJ・E・ミード 白石孝 四五一〇
一五七 伸縮為替相場と交易条件 白石孝 四五九
一五八 リンガジャティ協定について(1) 白石孝 四六一
一五九 東南アジアのナショナリズム問題の一例としてのインドネシアの独立とオランダとの関係—— 矢内原勝 四六四
一六〇 リンガジャティ協定について(2)—— 矢内原勝 四六五
一六一 東南アジアのナショナリズムの問題の一例としてのインドネシアの独立とオランダとの関係—— 矢内原勝 四六五
一六二 リンガジャティ協定について(3)—— 矢内原勝 四六六
一六三 東南アジアのナショナリズム問題の一例としてのインドネシアの独立とオランダとの関係—— 矢内原勝 四六六
一六四 最近のソ連賃金 加藤寛 四六一一
一六五 最近のソ連鉄道の現状と政策 加藤寛 四七六
一六六 英連邦の統一についての覚え書(上) 矢内原勝 四七七
一六七 英連邦の統一についての覚え書(下) 矢内原勝 四七八

部門別目録

一六五 ソ連の農業問題　気賀健三　四八九
一六六 西独鉄鋼業の復興過程　山本登　四八三
一六七 ソ連における重工業優先論　加藤寛　四九八
一六八 貿易政策の価格調整効果の分析——四つのケース——　白石孝　四九八
一六九 ソ連学界における若干の論争　加藤寛　四九一
一七〇 スターリング地域の植民地通貨制度　矢内原勝　四九一
一七一 一九五六年下半期の国際経済学における二つの問題　白石孝　五〇二
一七二 欧州共同市場成立の世界経済的意義　山本登　五〇五

F 産業部門

農林・水産・鉱業 F一〇一—一二五

一〇一 所謂る農村問題の実態　気賀勘重　二六一〇
一〇二 我国農業に於ける封建的性質について　小池基之　二七三
一〇三 地租改正前後の農民運動　小池基之　二七二
一〇四 我国農業に於ける外的自然的条件　小池基之　二八九
一〇五 東北農村に於ける自然経済の崩壊　小池基之　二九八
一〇六 農業生産の特殊性についての一考察　小池基之　三〇八
一〇七 東北農村に於ける年雇の労働形態　小池基之　三一二
一〇八 名子賦役と刈分小作——小本川流域地方の名子制度(一)——　小池基之　三二二
一〇九 名子制度と家畜小作——小本川流域地方の名子制度(二)——　小池基之　三三三
一一〇 農業の経営規模について　小池基之　三四一〇
一一一 農村に於ける商取引の展開——繭を中心として——　岩田伃　三五一二
一一二 松ヶ岡開墾場幹部の苦心　国分剛二　三六一
一一三 農業労働に於ける協同組織——とくに「ゆひ」及び「むら仕事」について　小池基之　三七二
一一四 田後の海割制と謂はゆる漁村共同体　羽原又吉　三七一〇
一一五 農業経営に於ける家族労働と雇傭労働　小池基之　三七一〇
一一六 農業経営——理論ならびに調査報告の展望——適正規模論についての若干の考察　小池基之　三八三四二
一一七 都市・農村問題の現在と将来　奥井復太郎　三九六
一一八 戦後における農業理論の展開　小池基之　四〇六
一一九 農業に於ける資本主義　小池基之　四〇七八九三
一二〇 アダム・スミス「地代論」の一考察　島崎隆夫　四一三九八
一二一 明治初期の地価変動について——田地を中心として——　金丸平八　四一六
一二二 戦後における地主制の変貌——神奈川県中郡金目村の場合——　島崎隆夫　四三六
一二三 地主層の構成　小池基之　四五八

一二四 改革後の自作農の性格——地主の存在形態——　島崎隆夫　四五九
一二五 「小農論」批判の一視点——とくに Ed. David; Sozialismus und Landwirtschaft, Zweite umgearbeitete und vervollständigte Auflage, Leipzig 1922. について　常盤政治　四五一二
一二六 S県S郡K町漁業実態調査報告——漁業経済の一研究——　伊東岱吉・小池基之・尾城太郎丸・常盤政治・平野絢子・高山隆三　四六九八
一二七 地代論に関する一研究——リチャード・ジョーンズの階級調和論——　平野絢子　四七一
一二八 農地改革をめぐる諸見解と「地主的土地所有」　平野絢子　四七五
一二九 地主制再編成の一形態——とくに農地移動について——　小池基之　四八七
一三〇 農地改革後における山林地主の一存在形態——割山慣行の実態とその本質——　平野絢子　四八九六
一三一 「封建的社会構成体の基本的経済法則」に関する覚え書——土地所有の性格規定のための序説——　常盤政治　四九六
一三二 「自由な農民的土地所有」に関する覚書　平野絢子　四九二
一三三 農業恐慌理論の一省察——十九世紀末農業恐慌の性格について(一)——　常盤政治　五〇四
一三四 日本農業問題と農民の階層区分——農業問題の回顧と展望——　常盤政治　五〇八
一三五 アメリカ合衆国における農業問題——農業恐慌研究ノートの一斷——　常盤政治　五〇一三

工業 F二〇一—二二〇

二〇一 戦争と統制経済政策　加田哲二　三三八
二〇二 近代産業史研究の成果に就いて——『中小工業』論の視角から——　豊田四郎　三六一〇
二〇三 昭和二十一年度の日本経済　鈴木諒一　四〇五
二〇四 マニュファクチュア論争について　伊東岱吉　四〇六
二〇五 戦後中小工業の実態(上)——茨城県下妻地方中小機械器具工場実態調査報告——　伊東岱吉　四一四
二〇六 戦後中小工業の実態(下)——茨城県下妻地方中小機械器具工場実態調査報告——　伊東岱吉　四一五
二〇七 生糸恐慌と製糸業労働者の労働条件(上)　金子八郎　四一七
二〇八 生糸恐慌と製糸業労働者の労働条件(下)　金子八郎　四一九

二〇九　中小工業労働の基本問題　伊東岱吉　四三六
二一〇　講和と日本経済——わが国産業構造の当面する基本問題——　伊東岱吉　四四一三
二一一　明治初年における殖産政策と在来産業　尾城太郎丸　四五六
二一二　中小工業危機の実態とその特質(上)　伊東岱吉　四六三
二一三　中小工業危機の実態とその特質(下)　伊東岱吉　四六六
二一四　独占と中小企業をめぐる理論的諸問題　伊東岱吉　四七一〇九
二一五　日本電気通信産業の構造(一)——有線通信機器工業実態調査報告——　伊東岱吉・尾城太郎丸　四八一
二一六　日本電気通信産業の構造(二)——有線通信機器工業実態調査報告　伊東岱吉・尾城太郎丸　四八四
二一七　日本綿業における中小機業の地位——地方体制の崩壊と問屋制の再編成——　青沼吉松　四九一
二一八　地方産業の現状と問題——遠州綿織物業を事例として——　青沼吉松　五〇一
二一九　産業再編成の最近の特徴と問題点——戦後日本の産業再編成による独占支配強化の諸形態について——　尾城太郎丸　五〇五
二二〇　化繊産業における中小機業の分析——その発展に於ける問題性について　藍原豊作　五〇八

商業・交通　F三〇一—三三四

二二一　支那に於ける道路建設に就て　増井幸雄　三一二
二二二　生産統制と貿易統制——綿業を中心として——　岩田仞　三一三
二二三　日本資本主義成立過程に於ける配給組織の変革——砂糖業を中心として　岩田仞　三一七
二二四　道路運送費の分析と其の効用　増井幸雄　三一一〇
二二五　我国に於ける小売商問題——配給組織論への理論的反省——　岩田仞　三一三
二二六　計画経済下に於ける配給組織の若干問題　岩田仞　三一七
二二七　自動車運送能力の拡大に就て　増井幸雄　三一二
二二八　青果市場の一研究——商業調査報告の一齣——　岩田仞　三一三
二二九　理論的商業学への一試論　岩田仞　三一七
二三〇　「商業学の対象と体系」　岩田仞　三一〇
二三一　道路交通の安全と自動車速度の制限に就て　増井幸雄　三一〇
二三二　自動車交通事業法の改正に就て　増井幸雄　三一一
二三三　商業政策の現代的課題——商業の倫理と論理——　岩田仞　三五四
二三四　配給概念と商業の本質　鈴木保良　三七三
二三五　昭和十二年以降の国鉄の輸送に関する統計　増井健一　三九五
二三六　小売商再建の課題（経営規模を決定する要因としての経費の問題）　鈴木保良　四〇一
二三七　昭和十二年以降の国鉄の輸送に関する統計について　増井健一　四〇二
二三八　米穀商業の性格(上)——東京に於ける米穀業界の変遷——　宇治順一郎　四一一三
二三九　わが国に於ける資本主義の発達と鉄道——（資本主義創始期）——　増井健一　四二三
二三〇　配給費用の諸問題　鈴木保良　四四一四三
二三一　配給費と配給過程合理化の問題　片岡一郎　四四一〇
二三二　生産者財配給の特異性　鈴木保良　四四一〇
二三三　鉄道運賃の性格に就ての論争(一)——タウシッグ対ピグー——　増井健一　四五五
二三四　鉄道運賃の性格に就ての論争（二）——タウシッグ対ピグー——　増井健一　四五九
二三五　協同組合配給の本質とその限界　鈴木保良　四五一一
二三六　輸送手段発達の地域性について　増井健一　四六四
二三七　配給における能率測定の問題点　片岡一郎　四六一三
二三八　再販売価格維持政策　鈴木保良　四七二
二三九　再販売価格維持制度の効果分析——合衆国醸造業の場合——　片岡一郎　四七一〇九
二三〇　McGarry 教授の配給観　片岡一郎　四八五
二三一　商業経営の機能的分化　鈴木保良　四八五
二三二　アルフレッド・マーシャルにおける交通論　増井健一　四八九
二三三　再販売価格維持制度と公正競争　片岡一郎　四九一一
二三四　国鉄運賃についての一考察——その市場経済的側面——　増井健一　四九一三

部門別目録

G　経営・会計

経営・会計　G一〇一—一五五

一〇一　貸借対照表の回顧的目的——フィッシャーの貸借対照表論——　山田正夫　二五七
一〇二　回顧的損益計算に於ける先見的要素——フィッシャーの貸借対照表価値論——　山田正夫　二六一三
一〇三　公私経営の接近と民有国営事業（産業統制より産業管理へ）　向井鹿松　三〇一一
一〇四　効果計算と原価計算の関係　小高泰雄　三一一〇
一〇五　経営価値と操業率に関する一考察　小高泰雄　三一一五
一〇六　経営機能と其の統制の一面　小高泰雄　三一一
一〇七　経営評価と経営計算　小高泰雄　三一七
一〇八　短期経営成果計算形式について　小高泰雄　三一一
一〇九　有限会社経営上の若干の問題　小高泰雄　三一三
一一〇　原価の時間的分析に関する諸研究　小高泰雄　三一四五
一一一　工場精神と労務管理　藤林敬三　三一四九
一一二　有機的貸借対照論に就いて　三辺金蔵　三一四一〇
一一三　労務管理に関する若干の考察　小高泰雄　三一四一〇

一二四 経営経済法則の体系に関する一考察 小高泰雄 三五一
一二五 工場管理の合理性に関する若干の問題 小高泰雄 三五八
一二六 統制経済下に於ける会計学の一問題 小高泰雄 三六二
一二七 作業労働に於ける協同形態について——経営組織論研究の一節—— 小高泰雄 三六八
一二八 工場管理論序説 小高泰雄 三七一
一二九 原単位計算制度に関する若干の考察 小高泰雄 三七九
一三〇 企業の自律的性格と経営法則 小高泰雄 三九四
一三一 経営民主化に関する若干の考察 小高泰雄 四〇二
一三二 企業批評の基準について 小高泰雄 四〇二
一三三 無額面株について 町田義一郎 四〇二
一三四 企業の再建と経営分析 三辺金蔵 四〇二
一三五 卸売業論 鈴木保良 四〇二
一三六 シュマーレンバッハの経営経済学研究方法について(一) 小高泰雄・古沢源刀 四〇二
一三七 シュマーレンバッハの経営経済学研究方法について(二) 小高泰雄・古沢源刀 四〇二
一三八 会計の本質と機能 小高泰雄・高橋吉之助 四〇二
一三九 我国における労務管理論の史的考察 森五郎 四〇二
一四〇 労務管理論における基本問題——作業意志と作業と作業条件の関係に就ての調査—— 小高泰雄 四〇四
一四一 経営管理と損益分岐図表 国弘員人 四〇四
一四二 内部統制とその監査 関口操 四〇四
一四三 標準原価計算に於ける「標準」の意義 白神俊彦 四〇四
一四四 棚卸資産の算定——最終原価と買入順法との対比—— 高橋吉之助 四〇四
一四五 生産管理の新なる局面に就いて——品質管理と原価管理との問題—— 田中英明 四〇四
一四六 経営労資関係に関する基本的考察——日本労務管理の序説的研究の一齣—— 森五郎 四〇四
一四七 動的貸借対照表の構成 高橋吉之助 四〇四
一四八 作業職能と人間関係(其の一)——工場における協同関係の一分析 関口操 四〇四
一四九 作業職能と人間関係(其の二)——工場における協同関係の一分析—— 関口操 四〇四
一五〇 販売予算編成の実証的一考察 和田木松太郎 四〇四
一五一 会計の管理機能について 小高泰雄 四〇四
一五二 製品計画に関する若干の考察 田中英明 四〇四
一五三 経営合理化とそれの労務諸関係への影響に関する一研究 森五郎 四〇四
一五四 生産性向上運動の経営学的意義 小高泰雄 四〇四
一五五 労務監査の理論 森五郎 四〇四
一五六 内部監査論覚え書 高橋吉之助 四〇四
一五七 経営生産組織形態の史的展開 野口祐 四〇四
一五八 アメリカ経営学再検討の課題 関口操 四〇四
一五九 科学的管理法の総体的考察 野口祐 四〇四
一六〇 経営政策論展開への一試論——アメリカにおける経営学の形成—— 関口操 四〇四
一六一 F・シェーンブルークをめぐる若干の基本的問題 小島三郎 五〇四
一六二 本邦経済資料解説(一) 片岡一郎 五〇七
一六三 戦後における日本労務管理の構造 森五郎 五〇八
一六四 転換期に立つ経営経済学——A・リゾブスキーを中心とせる試論—— 小島三郎 五〇九
一六五 経営学における価値論と職能論の統一について 小高泰雄 五〇

H 財政・金融・保険

財政 H一〇一—一四八
一〇一 租税経済論序説 高木寿一 二六一
一〇二 本邦財政の必然的動向と累進課税の経済的作用に就て 高木寿一 二六三
一〇三 米国に於ける戦債帳消論 町田義一郎 二七一
一〇四 ジ・ベ・セイの租税論 増井幸雄 二七二
一〇五 財政学の社会理論 永田清 二八二
一〇六 テレオロギーの財政学——Karel Englis を中心として観たる—— 永田清 二八七
一〇七 合衆国関税問題文献二種 浜田恒一 二八八
一〇八 現代租税制度に於ける一般取引税の地位と其本質 高木寿一 二八一
一〇九 普遍主義の財政学——アンドレエを中心として観たる—— 永田清 二九四
一一〇 財政社会学の展開——現象学の財政学と知識社会学の財政学—— 永田清 三〇二
一一一 現代国家財政の類型 高木寿一 三〇三
一一二 欲望論の財政学 永田清 三〇六
一一三 地方財政改善に関する内閣審議会中間報告（内閣調査局編纂） 高木寿一 三〇六
一一四 財政学の政治的性格 永田清 三〇一〇
一一五 財政と経済的過程 永田清 三一五
一一六 財政と景気政策——財政動態に関する一研究—— 永田清 三一九
一一七 路易十四世治下の財政状態——特にボアギュベールの諸著を中心として観たる—— 下田博 三一七
一一八 労働振興策の経済的意義——経済構造と財政支出に関する一研究—— 永田清 三一八
一一九 軍拡財政論——軍備拡張の過程とそ

部門別目録

の経済的作用の分析——　永田　清　三三　二
一二〇　戦時租税政策の諸問題　高木寿一　三三　三
一二一　戦時財政の基本問題　永田　清　三三　五
一二二　公債論の三つの型　永田　清　三三　九
一二三　租税経済の理念　永田　清　三四　一
一二四　財政と経済の波動——財政政策の基調として——　永田　清　三四　七
一二五　財政学の理論的課題——財政学の自己反省のために——　永田　清　三四　一〇
一二六　財政理論の発足——財政学の理論的課題続稿——　永田　清　三四　一三
一二七　公債とインフレーション——フランスに於ける経験——　永田　清　三五　六
一二八　日本農村財政の課題——財政と国民生活に関する研究、一——　永田　清　三五　一三
一二九　財政の源泉に関する考察　永田　清　三七　三
一三〇　「ェード」(Aides) に就いて——フランス旧制度下の間接税研究——　下田　博　三七　四
一三一　所謂アダム・スミス問題の一齣——財政思想史の立場から——　永田　清　三七　一二
一三二　現代公債政策の発展過程（序論）　高木寿一　四〇　五
一三三　財政学に於ける経費論の問題(一)　高木寿一　四一　四
一三四　財政学に於ける経費論の問題(二)　高木寿一　四一　五
一三五　財政学に於ける経費論の問題(三)　高木寿一　四一　六
一三六　公共経費の効果の可測性について　高木寿一　四三〔五六〕
一三七　「均衡財政」の理論と合目的性　高木寿一　四三　二
一三八　シャウプの国民所得論における政府部門の評価　大熊一郎　四四　六
一三九　雇傭をめぐる財政政策の展開——ベヴァリッジ＝カルドアの線に沿うて　永田　清　四四　七
一四〇　財政学に於けるケインズ革命の結果——新しい財政学体系の可能性——　高木寿一　四五　二
一四一　均衡予算の乗数効果に関する理論の現実的妥当性——膨脹効果か収縮効果か——　高木寿一　四五　一二
一四二　ヒックスの「厚生国家に於ける租税政策」について　高木寿一　四八　三
一四三　L・シュタインにおける国家と財政学　大島通義　四九　九
一四四　所得税と消費税の厚生効果　古田精司　四九　一〇
一四五　現代財政学に関する若干の疑問——一つの覚え書——　高木寿一　四九　一〇
一四六　ドイツ社会民主党初期の財政論　大島通義　五〇　四
一四七　成長モデルにおける財政政策の扱い方について　大熊一郎　五〇　七
一四八　本邦経済資料解説(三)　〔村井俊雄　古田精司〕　五〇　八

金融 H二〇一—二四七

二〇一　貨幣数量説と貨幣本質観との論理的関係　萩原吉太郎　二五　一
二〇二　アリストテレースよりオレームに至る貨幣理論の発達　萩原吉太郎　二五　五
二〇三　金の国際的移動に就いて　金原賢之助　二五　七
二〇四　外国為替管理の普及と其有する意義に就いて　金原賢之助　二六　三
二〇五　キング卿の通貨観——第十九世紀英国地金論者の一先蹤——　町田義一郎　二六　四
二〇六　短期清算取引の解剖と其の批判　向井鹿松　二六　七
二〇七　社債の平等担保に就て　佐々木暁秀　二六　七
二〇八　インフレーションの本質と恐慌の現段階に於けるそれの意義　金原賢之助　二六　一〇
二〇九　恐慌と金本位制の危機　小高泰雄　二六　一一
二一〇　為替相場とインフレーションとの関係に関する若干の考察　金原賢之助　二七　一
二一一　国際収支勘定より観たる我国民経済の世界大戦後に於ける推移　金原賢之助　二七　九
二一二　貨幣対外価値の一般的標章としての為替相場水準と為替相場の指標としての購買力平価水準　金原賢之助　二八　三
二一三　アヴィング・フィッシャーの世界不況に関する債務・デフレーション説　金原賢之助　二八　五
二一四　平価切下に関する若干の考察　金原賢之助　二八　七
二一五　アンダーライティングとシンヂケーティング——米国に於ける証券発行に関する協約の一斑　町田義一郎　二九　三
二一六　ゴッシェンの為替理論に就いて　金原賢之助　二九　六
二一七　コール市場に就いて　吉田寛　二九　七
二一八　クナップの為替理論　金原賢之助　二九　一一
二一九　貨幣的景気理論上に於ける金利の地位に就て　山本登　三〇　三
二二〇　為替清算制度　岩田伃　三〇　四
二二一　ベンディクセン及びエルシュタアの為替理論　金原賢之助　三〇　五
二二二　アメリカに於ける証券信託社債　〔金原賢之助　佐々木暁秀〕　三〇　一〇
二二三　金ブロックの崩壊を中心とする若干の貨幣問題　金原賢之助　三〇　一一
二二四　為替平衡資金に就いて　金原賢之助　三〇　一三
二二五　購買力平価説序説　金原賢之助　三一　五
二二六　国際的資本移動の発展傾向に就いて　金原賢之助　三一　九
二二七　米国に於ける取引所制度改正の概要　向井鹿松　三一　一〇
二二八　独逸を中心とせる為替清算協定　金原賢之助　三二　四
二二九　為替会社の没落原因　伊東弥之助　三二　五
二三〇　支那事変下に於ける我が国物価対策の若干問題　金原賢之助　三二　一一

部門別目録

三三 我が国戦時金融の現段階と若干の問題 金原賢之助 三三
三三 我国中小商工業金融に就いて 三村称平 三三
三三 支那の戦時通貨政策と法幣の前途——支那金融の研究・序説— 金原賢之助 三三
三四 世界為替政策の若干特徴に就いて 金原賢之助 三四
三五 金融統制と戦時経済の推移 金原賢之助 三五
三六 世界経済新秩序と金の地位 金原賢之助 三六
三七 経済圏支払決済制度に関する若干の考察 金原賢之助 三六
三八 戦争と金融——日清戦役における金融情勢— 野村兼太郎 四〇
三九 銀行の支払準備の意義——アメリカの法定準備制度を中心として— 町田義一郎 四三
四〇 ロンドン株式取引所会員の機能分離 小竹豊治 四四
四一 古典学派トランスファー理論の再検討 安井孝治 四四
四三 均衡為替理論の展開 安井孝治 四五
四三 ゲーム理論の銀行貸出政策への適用 村井俊雄 四六
四四 現金準備率と信用創造——多数銀行に於ける乗数の理論— 村井俊雄 四九
四五 世界為替政策の動向と若干特徴— 金原賢之助 五〇
四六 第二次戦後の世界為替研究序説 安井孝治 五〇
四七 為替相場と国際収支に関する若干問題——第二次大戦後の世界為替研究 金原賢之助 五〇
保険 H三〇一—三〇五 金原賢之助 佐々木暁秀 一〇一
三〇一 車輛信託の若干問題 三一
三〇二 経済学の保険論——古典学派およびマルクス主義経済学の保険観— 庭田範秋 四八
三〇三 保険商品説の研究 庭田範秋 四八
三〇四 社会保険の現状とその改正計画 園乾治 四八
三〇五 『保険と価値形成の問題』について 庭田範秋 四九

I 労働・社会問題

労働・社会問題 I一〇一—一九一
一〇一 「講壇社会主義」論戦——独逸社会政策理論史の一片— 奥井復太郎 三五
一〇二 「ナイツ・オブ・レーバー」の構成と其勢力の消長 園乾治 三五
一〇三 賃銀支給制度研究——集団的奨励賃銀支給制に就て— 小島栄次 三五
一〇四 第十九世紀末葉に於けるアメリカ労働運動の概観 園乾治 三五
一〇五 「社会政策学会」の成立とシュモラアの社会政策原理——独逸社会政策思想史続編— 奥井復太郎 三五
一〇六 明治二十年代に於ける労働者問題観 加田哲二 三五
一〇七 ヨーロッパ戦争以前のアメリカ労働組合運動——一八九八年より一九一四年に至る— 園乾治 三五
一〇八 ヨーロッパ戦争とアメリカ労働階級——一九一四年より一九二〇年に至るアメリカ労働運動史— 園乾治 三六
一〇九 米国社会事業概観 小島栄次 三六
一一〇 アメリカに於ける産業別労働組合運動一斑 園乾治 三六
一一一 精神技術学の危機——ソヴェート・ロシヤに於ける精神技術学に就いて 藤林敬三 三六
一一二 科学と社会事業 小島栄次 三六
一一三 最近十年間に於けるアメリカの労働階級運動 園乾治 三六
一一四 旧社会政策の没落——新社会政策論序説— 奥井復太郎 三七
一一五 労働科学に就いて 藤林敬三 三七
一一六 フランス革命と民衆運動——其指導者とその性質— 小泉順三 三七
一一七 中間階級問題の一考察 加田哲二 三七
一一八 社会調査に関する若干の基本的考察 小島栄次 三七
一一九 我国の日傭労働者に関する若干の考察 園乾治 三七
一二〇 精神技術学に関する若干の新刊書の紹介と批評 藤林敬三 三八
一二一 仏蘭西児童労働法の成立過程 下田博 三八
一二二 『アイ・ダブルユー・ダブルユー』の成立 園乾治 三八
一二三 能率心理学と人間技術学 藤林敬三 三八
一二四 不良住宅改良事業の根本方針と不良住宅の家主に関する調査に就いて 小島栄次 三八
一二五 アメリカに於ける失業補償運動 園乾治 三九
一二六 労働喜悦論 藤林敬三 三九
一二七 機械と労働者 藤林敬三 三〇
一二八 発明の社会学 藤林敬三 三〇
一二九 経営社会学、経営社会政策、労働者心理学 藤林敬三 三〇
一三〇 手工業徒弟並に青年農業労働者に関する労働者心理学の一研究 藤林敬三 三〇
一三一 カール・マルクスの『労働者調査』、技術の進歩と失業——L. V. Birck と E. Lederer の見解に就いて— 藤林敬三 三〇
一三二 アルフレット・ケーラーの労働者解放理論 藤林敬三 三一
一三四 労働者心理学の体系概観 藤林敬三 三一
一三五 前世紀後半の高賃銀論 藤林敬三 三四

部門別目録

一三六　八時間労働論と労働時間最適限論の拾頭　藤林敬三　三四五
一三七　労働者政策の基本問題　藤林敬三　三四一〇
一三八　吾国に於ける労働移動の研究――特に先きの欧州大戦当時の労働移動現象に就いて――　藤林敬三　三五三
一三九　吾国工、鉱業労働者の労働移動の研究――特に前世界大戦後、満洲事変の勃発に至るまで――　藤林敬三　三五八
一四〇　労働移動の概念に就いて　藤林敬三　三五一一
一四一　不可避的労働移動に関する一考察――吾が国工、鉱業労働者中の死傷病生産脱落者に就いて――　藤林敬三　三六五
一四二　社会政策の再検討――最近の若干の新刊書を顧みて――　藤林敬三　三六一〇
一四三　労働移動問題に対する明治末期に於ける吾が国政府の関心に就いて　藤林敬三　三六一一
一四四　厚生問題に関する最近の若干の文献に就いて　藤林敬三　三七五
一四五　明治二十年代に於けるわが紡績労働者の移動現象に就いて　藤林敬三　三七七
一四六　エンゲル法則の動態的意義に就いて　中鉢正美　三九四
一四七　大都市人口の規制　奥井復太郎　四〇三
一四八　わが社会保障制度と生活保障体制(上)――わが国における生活保障体制の特質について――　藤林敬三　四一八
一四九　わが社会保障制度と生活保障体制(下)――わが国における生活保障体制の特質について――　藤林敬三　四一九
一五〇　生活研究の発生――イーデンの貧民状態について――　中鉢正美　四一一〇
一五一　わが国失業現象の特質について　藤林敬三　四三五
一五二　社会事業の本質に関する二つの見解　小島栄次　四三五
一五三　ハロルド・ラスキー『現代革命の省察』(Harold J. Laski; Reflections on the Revolution of our Time, 1943.)を読む　飯田鼎　四三六
一五四　「社会保障制度に関する勧告」の成立　園乾治　四四一
一五五　東京地方における機械工業労働事情の研究(一)　森五郎　四四三
一五六　戦後わが国民生活の変動過程　中鉢正美　四四九八
一五七　戦後における工業労働事情の研究――東京地方機械工業を事例として――　森五郎　四四一
一五八　家計項目における耐久財の意味　中鉢正美　四五四
一五九　大麻経済に於ける労働力の存在形態　野口祐　四六一〇
一六〇　労働者意識についての若干の問題(上)――四工場の調査を素材として――　青沼吉松　四七四
一六一　戦後失業対策と都市日雇労働者　黒川俊雄　四七四
一六二　労働時間問題の現代的意義　藤林敬三　四七五

一六三　ヒューマニスト・ギャスケルと産業革命期の英国労働者階級――ギャスケルの『英国の産業人口』一八三三年、を読んで――　飯田鼎　四七五
一六四　南北戦争・再建期(一八六〇―七二年)における労働運動(一)　川田寿　四七五
一六五　南北戦争・再建期(一八六〇―七二年)における労働運動(二)　川田寿　四七六
一六六　絹織業に於ける生産形態の発展と賃労働の形成過程――特に典型としての桐生を中心として――　野口祐　四七六
一六七　労働者意識についての若干の問題(中)――四工場の調査を素材として――　青沼吉松　四七七
一六八　労働者意識についての若干の問題(下)――四工場の調査を素材として――　青沼吉松　四七七
一六九　イギリス労働党の国有化理論――国有化政策の背後にひそむもの――　青沼吉松　四七一一
一七〇　イギリス労働党成立の思想史的背景(上)――労働党史研究序説――　飯田鼎　四七三
一七一　生活保護法関係の社会事業に関する諸問題　小島栄次　四八一
一七二　イタリヤにおける社会民主主義とファシスト運動――W. Hilton-young; The Italian left, a short history of political socialism in Italy, 1949. によせる　飯田鼎　四八三
一七三　一八三〇年代におけるイギリス労働運動――労働党史研究序説(中)――　飯田鼎　四八六
一七四　ベヴァン主義とイギリス労働党――労働党左派の発展過程とその意義　飯田鼎　四八八
一七五　「同一労働同一賃金」の原則と婦人労働問題　黒川俊雄　四八一〇
一七六　社会政策と労働の人間的構造――いわゆる「賃労働の理論」によせて――　中鉢正美　四八一三
一七七　チャーチスト運動の特質とその歴史的意義について　飯田鼎　四九一
一七八　十八世紀末期のイギリスにおける急進主義運動と労働者階級　飯田鼎　四九七
一七九　経済心理学における同型理論 I　中鉢正美　四九七
一八〇　労資関係の歴史的発展とわが国の労資関係の特質　藤林敬三　四九九
一八一　アメリカ労働組合の理論――コモンズ理論について――　川田寿　四九九
一八二　黎明期のイギリス労働組合運動――団結禁止法と労働者階級――　飯田鼎　四九一三
一八三　経済心理学における同型理論 II　中鉢正美　五〇一
一八四　「医療保障制度に関する勧告」の批判　園乾治　五〇四
一八五　ナポレオン戦争後の恐慌期における

部門別目録

労働運動と急進主義運動——ウィリヤム・コベットの時代　飯田鼎　一八六　五〇
一八三二年の選挙法改正の歴史的意義——チャーチスト運動史序説——　飯田鼎　一八七　五〇　八
学校社会事業について——社会事業の概念の問題と関連して——　飯田・鈴木諒一　一八八　五〇　九
わが国における労使協議制の問題　小島栄次　一八九　五〇　一〇
産業における社会関係——わが国労働者の社会意識について——　藤林敬三　一九〇　五〇　一一
現代経済機構における労働組合——市場の組織化——　青沼吉松　一九一　五〇　一二
佐野陽子　一九二　五〇　一三

J 社会学

社会学 J一〇一—一五六

日本におけるファッシズムの概観　加田哲二　一〇一　二六
日本における国民社会主義と無産政党の動向　加田哲二　一〇二　二六
現代日本における国粋的社会思想　加田哲二　一〇三　二六　八
都市社会学の一考察　奥井復太郎　一〇四　二六　一〇
大都市の人口学的考察の限界　奥井復太郎　一〇五　二六　一〇
大都市に蝟集する知識階級に就ての統計　奥井復太郎　一〇六　二七　一一
大都市に於ける知識階級の地域的研究——東京及大阪を中心とする統計的研究——　奥井復太郎　一〇七　二七　八
婚姻儀式の公示性と婚姻概念の二構成要素　奥井復太郎　一〇八　二七　一〇
大ロンドン北西部一帯の工業調査（The Industries of Greater London. Being a survey of the recent industrialisation of the nothern and western sectors of Greater London. by D. H. Smith. London, P. S. King & Son, Ltd, 1933.）　打村鉱三　一〇九　二七　一一
婚姻の制度的特性或は経済性　奥井復太郎　一一〇　二八　一
京浜工場地帯研究（大都市地域的研究の一部）　打村鉱三　一一一　二八　三
「都会と農村の分類に就て」　奥井復太郎　一一二　二八　四
東京市に於ける工場規模分布の調査　寺尾琢磨　一一三　二八　四
大都市生活圏の決定について（東京都市生活圏の調査）　奥井復太郎　一一四　二八　六
婚姻に於ける『生物学的』と『社会学的』　奥井復太郎　一一五　二八　一〇
「盛り場」に関する若干考察（都市に於ける中心地域の構成）　打村鉱三　一一六　二八　一一
学生の日常生活に於ける「動き」の調査（学生生活調査によって得たる一結果）　奥井復太郎　一一七　二九　三
戦争社会学文献雑考　奥井復太郎　一一八　二九　八
学生生活の思想的方面の一調査——学生生活調査第二報告——　加田哲二　一一九　二九　一〇
東京ビルディング街の発展に関する一調査（都心地形成に関する一資料）　奥井復太郎・藤林敬三　一二〇　二九　一〇
地域的社会調査に関する若干考察　奥井復太郎　一二一　三〇　一
都市社会の構成　奥井復太郎　一二二　三〇　六
人口構成に現はれた地域性『三田』社会調査報告第一　奥井復太郎　一二三　三〇　一一
身分構成に現はれた地域性『三田』社会調査報告第二　奥井復太郎　一二四　三一　一
戦争の本質と起源——戦争社会学序説——　奥井復太郎　一二五　三一　二
原始時代の財産制　加田哲二　一二六　三一　三
世帯構成に現はれた地域性『三田』社会調査報告第三　望月玉三　一二七　三一　三
有業者及び其の業態に現はれた地域性『三田』社会調査第四報告　奥井復太郎　一二八　三一　三
民族主義に関する文献　奥井復太郎　一二九　三一　四
職業構成に現はれた地域性『三田』社会調査第五報告　加田哲二　一三〇　三一　五
民族・民族性・民族主義——民族主義研究序論——　奥井復太郎　一三一　三二　五
都市郊外論序説　加田哲二　一三二　三二　一三
都市生活論　奥井復太郎　一三三　三二　九
鎌倉町の現代相　奥井復太郎　一三四　三三　一
大都市の発展に伴ふ近郊社会の変質——（鎌倉町調査の第二報告）——　奥井復太郎　一三五　三三　一〇
過大都市論の検討　奥井復太郎　一三六　三四　四
強大国は如何なる領域的基礎を持つべきか——基礎地帯・基礎海岸・国家計画化と社会科学（国土計画論への一省察）　加田哲二　一三七　三四　八
計画化と統制——（国土計画の政治的性格）——　奥井復太郎　一三八　三四　八
国土と地方の問題　奥井復太郎　一三九　三四　一〇
本邦都市発達の近状　奥井復太郎　一四〇　三五　三
支那民族運動の相貌　奥井復太郎　一四一　三五　七
戦時都市経済論序　望月玉三　一四二　三五　八
時局指導に関する若干考察　奥井復太郎　一四三　三六　五
戦力論——その静態的考察——　奥井復太郎　一四四　三七　二
戦力政策の進展　加田哲二　一四五　三七　五
農工調整問題の展望　奥井復太郎　一四六　三七　八
人種問題の本質　加田哲二　一四七　三八　一

部門別目録

一四九　東亜文化の再検討　野村兼太郎　三八七
一五〇　地方主義による地方産業の編成問題（或る覚書）　奥井復太郎　三九一
一五一　コムミュニティーとしての都市　奥井復太郎　四一七
一五二　資本主義の合理性　青沼吉松　四二三
一五三　産業と地域社会――M市の金物業について――　青沼吉松　四六五
一五四　明治・東京の性格（都市生活史についての覚書）　奥井復太郎　四六六
一五五　現代ドイツ社会学の思考状況に関するノート――その人間中心主義的志向をめぐって――　石坂巌　四八九
一五六　モンゴル遊牧民の男女分業――その社会的な地位との関係――　後藤富男　四八一三

K　その他

その他　K一〇一―一一九

一〇一　防人の制度　相磯貞三　四九特
一〇二　「運命論者ジャック」の対話の構造　原宏　四九特
一〇三　藤原氏遺体の動物学的調査とその保存措置について　森八郎　四九特
一〇四　ルクレーティウスに就いて　樋口勝彦　四九特
一〇五　Mazur Kiewicz の定理の拡張について　中村勝彦　四九特
一〇六　Verbal とその主語　佐藤林平　四九特
一〇七　意識のピラミッド　塚越敏　四九特
一〇八　エリオットの「荒地」をめぐる問題　上田保　四九特
一〇九　正倉院御物の昆虫学的調査とその虫害の防除について　森八郎　五〇特
一一〇　放射性同位元素に依る流量測定法　後藤照彦　五〇特
一一一　ハーバート・リードの現代芸術論　上田保　五〇特
一一二　Terentius 喜劇の詩形構造　樋口勝彦　五〇特
一一三　フランス語に於ける直接補語である人称代名詞とそれが代表する名詞との拡充関係について　木内林太郎　五〇特
一一四　十六世紀のドイツ語　佐藤林平　五〇特
一一五　コルリッジと『悔恨』　由良君美　五〇特
一一六　'The Tale of King Arthur and the Emperor Lucius' に於ける倒置及び前位について　小林庸浩　五〇特
一一七　Relative Pronoun に関する一考察(一)　荒木良治　五〇特
一一八　Philosophical Attitudes in Aldous Huxley's Novels ――*Brave New World*――　海老塚敏男　五〇特
一一九　Poe as a Short Story Writer　三浦新市　五〇特

人名別索引

〔ローマ字書きABC順〕

藍原豊作……F二一〇
相磯貞三……K一〇一
青沼吉松……F二一七・F二一八・I一六〇・I一六七・I一六八・I一九〇・J一五二・J一五三
荒木良治……K一一七
遊部久蔵……A一九三・A一九五・A二〇一・A二〇五・A二一三・A二三四・A二四八・A二四九・A二四四
Bronfenbrenner M. A二三〇
千種義人……A一四五・A一四七・A一五〇・A一五一・A一五四・A一五六・A一五八・A一六二・A一六五・A一六八・A一七二・A一七七・A一八〇・A一八五・A一八七・A一九一・A一九二・A一九八・A一九九・A二〇四・A二一八・A二二三・A二四五・A二七四
中鉢正美……I一四六・I一五〇・I一五六・I一五八・I一七六・I一七九・I一八三
海老塚敏男……K一一八
江波戸靖……A二七五
藤林敬三……E一一〇・G一一一・I一一五・I一二〇・I一二三・I一二六・I一二七・I一二八・I一二九・I一三〇・I一三一・I一三二・I一三三・I一三四・I一三五・I一三六・I一三七・I一三八・I一三九・I一四〇・I一四一・I一四二・I一四三・I一四四・I一四五・I一四八・I一四九・I一五一・I一六二・I一八〇・I一八九・J一一九
福岡正夫……A一九六・A二〇〇・A二〇一・A二〇六・A二〇九・A二一四・A二二五・A二二六・A二二九・A二三一・A二三五・A二三八・A二四二
古沢源刀……G一一六・G一一七
古田精司……H一四四・H一四八
後藤照彦……K一一〇
後藤富男……J一五六
羽原又吉……C一四一・C一四三・C一五〇・C一五九・C一六〇・C一六四・C一六六・F一一四
萩原吉太郎……A一一三・H一〇一・H一〇二
浜田恒一……A二〇一・A二〇七・A二一三・A二三一・A二三二・A二四〇・C一四〇五・E一〇七・H一〇七
原宏……K一〇二
橋本勝彦……E一一一
服部謙太郎……C一六八・C一七一・C一七三・C一七四・C一七五・C一七六・C一七八・C一七九
服部成三郎……A一四六・A一五四
速水融……C一八一・C一八三・C一八六・C一八七・C一九四・C一九七・

樋口勝彦……C二九九・C三〇〇・C三〇五・C三〇六・C三一〇
平井新……K一〇四・K一一三
A四四五・A五〇一・A五〇九・A五一七・A五一九・A五二〇・A五二六・A五二九・A五三〇・A五三一・A五三三・A五三九・A五四四・A五四五・A五四七・A五五三
平野絢子……F一二七・F一二八・F一三〇・F一三
飯田鼎……A五四三・A五五〇・I一五三・I一六三・I一六九・I一七〇・I一七二・I一七三・I一七四・I一七七・I一七八・I一八二・I一八五・I一八六・I一八七
飯島瑞子……E一五四
井村喜代子……A四四七・A四四九・A四五一
井上芳郎……C四一〇・C四一一
石坂巌……J一五五
伊藤秀一……C四〇一・E一〇一・E一〇三・E一〇五・E一〇六・E一〇九
伊東岱吉……A一〇九・A一一五・A一二七・F一二六・F二〇四・F二〇五・F二〇六・F二〇九・F二一〇・F二一一・F二一三・F二一四・F二一五・F二一六
伊東弥之助……C二二一・C二四〇・C二五二・C二六一・C二六七・C二九八・H二二九
岩田仞……E一一二・E一一四・E一一五・E一一六・E一一八・E一二六・F一一一・F二〇一・F二〇三・F二〇五・F二〇六・F二〇八・F二〇九・F二一〇・F二一二・H二二〇
新保博……C二六一・C二七一・C二七七
加田哲二……A一六〇・A一七〇・A二二四・A二二五・A二六八・A二五〇三・A二五〇六・A二五一〇・A二五一二・A二五一四・A二五一五・A二五一六・A二五一八・A二五二一・A二五二三・A二五二四・A二五二八・E一一一・E一一二・E一一三・E一一五・E一一六・E一二七・E一二八・F一〇〇一・I一〇六・I一一七・J一〇一・J一〇二・J一〇三・J一一八・J一二五・J一二九・J一三一・J一三七・J一四五・J一四六・J一四八
金丸平八……C二六九・C二七〇・C二八四・C二八五・C二八八・C二九五・C二九六・C三〇一・C三〇七・C四二八・C四三三・F一一二
金子八郎……F一〇七・F一〇八
片岡一郎……F二二一・F二二七・F二二九・F二三〇・F二三二・G一五一
加藤寛……A二二一・A二二一・A二四六・E一五三・E一六一・E一六二・E一六七・E一六九
川田寿……I一六四・I一六五・I一八一
気賀勘重……F一〇一
気賀健三……A一〇二・A一〇五・A一一一・A一一六・A一一七・A一二四・A一二六・A一二八・A一二九・A一三二・A一三五・A一三七・A一四一・A一四三・A一六六・A一六九・A一七二・A一七四・A一七五・A一七九・A一八一・A一八三・A一八六・A一八八・A二二〇・A二二〇・A二四七・A二四三・A二五二・A二五三四・A二五八・A二五四〇・A二五四九・E一六五
木村喜久弥……C四二九
金原賢之助……E一二〇・E一二四・H一〇三・H一〇四・H一〇八・H二一〇・H二一一・H二一二・H二一三・H二一四・H二一六・H二一八・H二二一・H二二二・H二二三・H二二四・H二二五・H二二六・

H二二八・H二二〇・H二二一・H二二二・H二二四・H二二五・H二二六・H二二七・H二四五・H二四七・H二〇一
木内林太郎……K一一三
北原勇……A二四四
小林宗三郎……A一四九・E一一六
小林庸浩……K一一六
小高泰雄……A一〇二・A一一九・A一一二・A一一五・A一一七・A二〇九・A二二二・G一〇四・G一〇五・G一〇六・G一〇七・G一〇八・G一〇九・G一一〇・G一一二・G一一四・G一一五・G一一六・G一一七・G一一八・G一一九・G一二〇・G一二一・G一二二・G一二六・G一二七・G一二〇・G一四一・G一四四・G一五五・H二〇九
小池基之（徳太郎）……A一一三・A二二〇・A二二七・F一〇一・F一〇二・F一〇四・F一〇五・F一〇六・F一〇八・F一〇九・F一一〇・F一一三・F一一五・F一一六・F一一八・F一一九・F一二二・F一二六・F一二九
小泉順三……A五〇二・A五〇四・A五〇七・C四〇九・C四一〇・I一一六
小泉信三……A一〇七・A二二七・A五一一・E一〇二
小島栄次……D一〇一・D一〇二・D一〇三・D一〇四・D一〇五・D一〇六・D一〇七・D一〇八・D一〇九・D一一〇・D一一一・D一一二・D一一三・D一一四・D一一五・D一一六・D一一七・D一一八・D一一九・D一二〇・I一〇二・I一〇九・I一一二・I一一八・I一二四・I一五二・I一七一・I一八八
小島三郎……G一五一・G一五四

国分剛二……C一〇一・F一一二
小竹豊治……H二四〇
幸田成友……C二六八
国弘員人……G一二一
黒川俊雄……A四二四・A四二五・A四二六・I一六一・I一七五
町田義一郎……A二二一・G一二二・H一〇二・H一〇五・H二二五・H二二九
増井健一……F二二五・F二二七・F二二九・F二二二・F二二四・F二二六・F二二二・F二二四
増井幸雄……A一〇五・A二二四・A二二八・F一〇一・F一〇四・F一〇七・F二二一・F二二二・H一〇四
松尾謙介……C二六五
三村称平……H二二一
三井高陽……C四一八
三浦新市……K一一九
望月玉三……E一一八・J一一六・J一四二
森五郎……G一二九・G一二六・G一四二・G一四五・G一五二・I一五五・I一五七
森八郎……K一〇二・K一〇九
向井鹿松……A一一八・G一〇二・H一〇六・H二二七
村井俊雄……H一四八・H二四二・H二四四
永田清……A二四四・A二六七・A五〇八・A五一一・E一四一・H一〇五・H一〇六・H一〇九・H一一〇・H一一二・H一一四・H一一五・H一一六・H一一八・H一一九・H一二一・H一二二・H一二三・H一二四・H一二五・H一二六・H一二七・H一二八・H一二九・

H一三一・H一三九
中村勝彦……K一〇五
中村勝己……C二八〇・C四四〇・C四五一・C四六三
中山三郎……A一九四・A一九七
西田長寿……A四二四・A四四一・A四四二
庭田範秋……H三〇一・H三〇三・H三〇五
野口祐……C一〇六・G一四七・G一四九・I一五九・I一六六
野村兼太郎……A一五三・A二〇三・A二〇六・A二二一・A二二六・A二三九・
A二三八・A二三〇・A二三五・A二三六・A二六一・A二六六・A二八一・
A二九三・A二九九・A四二一・A四二三・A四三三・A四四〇・A五一五・
A五二五・C一〇一・C一〇三・C一〇五・C一〇六・C一〇七・
C一〇八・C一〇九・C一一〇・C一一一・C一一二・C一一四・
C一一五・C一一六・C一一七・C一一八・C一一九・C一二〇・
C一二一・C一二二・C一二四・C一二五・C一二六・C一二八・
C一二九・C一三〇・C一三一・C一三二・C一三三・C一三四・
C一三五・C一三六・C一三七・C一三八・C一三九・C一四一・
C一四四・C一四五・C一四六・C一四七・C一四八・C一四九・
C一五一・C一五三・C一五四・C一五五・C一五六・C一五七・
C一六三・C一九三・C一四一三・C一四一六・C一四二〇・H一三八・
J一四九
小尾恵一郎……B一一五・B一一九・B一二四
及川恒忠……E一〇四
尾城太郎丸……F一一六・F一三一・F一二五・F一二六・F一二九
奥田忠雄……→武村忠雄
奥井復太郎……F一一七・I一〇一・I一〇五・I一一四・I一四七・J一〇四・
J一〇五・J一〇六・J一〇七・J一〇九・J一一一・J一一三・
J一一四・J一一六・J一一七・J一一九・J一二〇・J一二一・
J一二三・J一二三・J一二四・J一二七・J一二八・J一三〇・
J一三一・J一三三・J一三四・J一三五・J一三六・J一三八・
J一三九・J一四〇・J一四一・J一四三・J一四四・J一四七・
J一五〇・J一五一・J一五四
大熊一郎……A一二三・A一二三・A一二六・H一二八・H一四七
大島通義……H一四三・H一四六
尾崎巌……B一二一・B一二五・B一二九
三辺金蔵……G一一一・G一一二
三辺清一郎……A二六九・A二八六・A二九〇・A二九六・A四一〇・A四一二・
A四一九・A四一五
佐野陽子……I一九一
佐々木暁秀……H一〇七・H一一一・H一〇一
佐藤林平……K一〇六・K一一四
佐藤保……B一一〇・B一一一・B一一六
関口操……G一一一・G一一六・G一一九・G一四八・G一五〇
志田節子……C一〇一
島崎隆夫……C一六九・C一八一・C一九九・C一九〇・C一〇〇一・C一〇〇八・
C一一一・C一一三・F一一〇・F一一三・F一一四
下田博……A一一五・A一二五・A一二七・C一四〇八・E一一〇・H一一七・
H一一〇・I一一一
白神俊彦……G一一三
白井厚……A五五一・A五五二
白石孝……E一四四・E一四七・E一五〇・E一五一・E一五六・E一五七・
E一六八・E一七一
園乾治……H一〇四・I一〇一・I一〇四・I一〇七・I一〇八・I一一〇・
I一一三・I一一九・I一一三・I一一五・I一一四・I一八四
鈴木諒一……A一八二・A一八四・A一八九・A一九〇・A一〇一・A一〇八・
A二一一・A二一六・A二一九・A二一七・A二一七・A四一九・
A四五〇・B一〇六・B一〇七・B一〇八・B一〇九・B一一一・
B一一七・B一一一・B一一八・B一一〇・F一〇一・I一八七
鈴木保良……F一一四・F一一六・F一一〇・F一一一・F一一五・F一一八・
F一一一・G一一五
高木寿一……E一〇八・H一〇一・H一〇八・H一一一・H一一三・
H一一〇・H一一一・H一一三・H一一四・H一一五・H一一六・
H一一七・H一四〇・H一四一・H一四二・H一四五
高橋吉之助……G一一八・G一一四・G一一七・G一四六
高橋誠一郎……A一七六・A一七八・A二〇一・A二〇四・A二〇八・A二一一・
A二二〇・A二二一・A二二四・A二二九・A二二一・A二二六・
A二二七・A二二八・A二二九・A二四一・A二四二・A二四三・
A二四五・A二四六・A二四九・A二五〇・A二五一・
A二五二・A二五四・A二五五・A二五六・A二五七・A二五八・
A二五九・A二六〇・A二六一・A二六三・A二六四・A二六五・
A二七〇・A二七一・A二七二・A二七三・A二七六・A二七九・
A二八〇・A二八二・A二八三・A二八四・A二八五・A二八七・
A二八八・A二八九・A二九一・A二九二・A二九四・A二九五・
A二九八・A二九〇・A二〇〇・A二〇一・A二〇二・A二〇三・
A二〇四・A二〇五・A二〇六・A二〇七・A二〇八・A二一一・
A二一二・A二一三・A二一四・A二一五・A二一六・A二一八・
A二一九・A二二〇・A二二一・A二二二・A二二三・A二二四・
A二二五・A二二六・A二二七・A二二八・A二二九・A二三〇・
A二三一・A二三二・A二三三・A二三四・A二三五・A二三六・
A二三七・A二三八・A二三九・A二四一・A二四二・A二四三・
A二四四・A二四五・A二四六・A二四七・A二四八・A二四九・
A二五〇・A二五一・A二五二・A二五三・A二五四・A二五五・
A二五六・A二五七・A二五八・A二五九・A二六〇・A二六一・
A二六二・A二六三・A二六四・A二六五・A二七〇・A二七一・
A二七二・A二七三・A二七六・A二七九・A二八〇・A二八一・
A二八二・A二八三・A二八四・A二八五・A二八七・A二八八・
A二八九・A二九一・A二九二・A二九四・A二九五・
高村象平……C一〇一・C一〇二・C一〇三・C一〇四・C二〇四・C二二〇・
C四〇一・C四〇二・C四〇四・C四〇六・C四一一・C四一四・
C四一五・C四一九・C四二一・C四二三・C四二四・C四二五・
C四二六・C四二七・C四二八・C四二九・C四三〇・C四三一・
C四三二・C四三三・C四三四・C四三五・C四三六・C四三七・
C四四一・C四四四・C四五六・C四七一
高山隆三……F一二六
武村忠雄……A一〇一・A一〇四・A一〇六・A一〇八・A一一〇・A一一四・
（旧姓奥田）A一一二・A一一二・A一二〇・A一三一・A一三三・A一三六・
A一三八・A一四一・A一四四・A一四六・A一四八・A一五一・
A一五五・A一五七・A一六一・A一六四・A一六七・A一七一・
A二一四・A二七七
田中英明……G一二五・G一四二
寺尾誠……C四六五・C四六七・C四七二
寺尾琢磨……A一二四・A一四〇・A一三六・A一三七・A一四一六・B一〇一・
B一〇二・B一〇三・B一〇四・B一〇五・B一〇六・B一〇七・
B一〇一・B一〇二・B一〇三・B一〇四・B一〇五・B一〇六・B一〇一・
B一〇二・B一〇三・B一〇四・B一〇五・B一〇六・B一〇七・

B三〇八・B三〇九・B三一〇・B三一一・B三一二・B三一三・B三一五・E一四〇・J一一二
土田玉雄……A五〇五
辻村江太郎……B二一二・B二二四・B二二六・B二三六・B二三七・B二三一・B二四四
塚越敏……K一〇七
東井金平……E一一七
常盤政治……A二三一・F一二五・F一二六・F一三一・F一三三・F一三四・F一三五
富田重夫……A二〇七・A二一〇・A二一七・A二二一・A二三八・A二三九・A二四三
豊田四郎……A一五九・A一六三・C一〇五・F二〇二
打村欽三……A五二三・C四一七・J一〇八・J一一〇・J一一五
上田保……K一〇八・K一一一
植木憲二……A四三七・A五四一・A五四六
宇治順一郎……C二七一・F三一八
梅谷泰夫……A五四八
宇尾野久……C二九一・C四四五・C四四六・C四四七・C四五〇・C四五四・C四五七・C四五八・C四五九・C四六〇・C四六一・C四六六・C四六八
和田木松太郎……G一四〇
渡辺大濤……A四四八
渡辺国広……C四四一・C四四八・C四四九・C四五一・C四五三・C四五五・C四六二・C四六四・C四六九
渡辺建……A四二三・A四二三・A四二七・A四五二・A四五三
山部徳雄……A二二一・A二二五
山田正夫……G一〇一・G一〇二
山本登……A二九・E一一九・E一二二・E一二四・E一二七・E一二九・E一三二・E一三三・E一三五・E一三八・E一三九・E一四一・E一四三・E一四五・E一四六・E一四八・E一四九・E一五五・E一六六・E一七二・H二一九
矢内原勝……E一五一・E一五八・E一五九・E一六〇・E一六三・E一六四・E一七〇
安井孝治……H二四一・H二四二・H二四六
安川正彬……B二一〇・B二一一
安沢秀一……C二九二・C三〇四・C三〇九・C三一二
吉田寛……A二二一・H二二七
由良君美……K二一五

昭和三十二年十月二十五日 印刷
昭和三十二年十一月一日 発行

〔定価 二五〇円〕
郵税二〇円

三田学会雜誌
第五十巻記念論文集
十・十一月合併号
付・25～50巻総目録

編集兼発行人 東京都港区芝三田二丁目二番地 慶應義塾大学経済学会 代表者 気賀健三
電話 三田(45)五一八一
振替口座番号 東京四四〇五六

印刷者 東京都港区芝三田豊岡町八番地 図書印刷株式会社 安倍七郎

発売所 東京都高輪局区内三田豊岡町八番地 慶應通信
振替口座番号東京一五五四九七